

博多 198

— 博多遺跡群第247次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1511集

2024

福岡市教育委員会

博 多 198

— 博多遺跡群第247次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1511 集



2024

福岡市教育委員会



1. 五彩碗・小杯・皿（外側）
1. SK01 2.SK18 3.A-1 I層



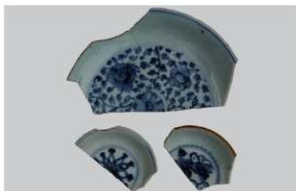
2. 五彩碗・小杯・皿（内側）



3. 五彩合子 SK32



4. 青花碗・皿 1・4.SK01 2.SE31 3.A-1 I層



5. 青花 端反皿 1・3.SD29 2.A-2 I層



6. 青花 碁筋底皿 A-1 I層



7. 青花 丸皿・小杯・合子 1・2.SK17 3.B-1 I層



8. 白磁 端反皿 B-1 I層

卷頭図版2 朝鮮陶磁



1. 粉青沙器 刷毛目碗 SD37



2. 粉青沙器 粉引碗 SD37



3. 白磁 碗 SD29



4. 白磁 碗 SK33



5. 白磁 碗 SK06



6. 白磁 碗 SX21



7. 白磁 杯 SD29



8. 白磁 碗 SK26 · 杯 SD29



1. 肥前陶器 碗・小碗
1. SK18 2・3.SK17 4.SX08



2. 肥前陶器 皿 SK17



3. 肥前陶器 向付 SK17



4. 肥前陶器 瓶 SK17



5. 肥前陶器 皿 SK17



6. 陶器 碗 SK17



7. 陶器 向付 (外側) SK18



8. 陶器 向付 (内側)

卷頭図版 4



1. 陶器すり鉢 (外側) SD29



2. 陶器すり鉢 (内側)



3. 瀬戸美濃陶器 碗・皿 SX08



4. 骨牌 A-1 I層



5. 漆器 皿 (外側)



6. 漆器 皿 (内側)

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用にも努めています。

本書は、テナントビル建設に伴い、令和3年度に発掘調査を実施した博多遺跡群第247次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉の一大拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告はその交易活動に関わる場とみられる区域の調査で、調査成果は、戦国期の対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、施主の昭和住宅株式会社、施工の日建建設株式会社をはじめ、関係者の方々からご理解とご協力を賜りましたことに対し、ここからの感謝の意を表する次第です。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋正信

例言

- 1 本書は福岡市教育委員会がテナントビル建設に伴い、福岡市博多区店屋町 104 番、105 番（地番）で発掘調査を実施した博多遺跡群第 247 次調査の報告である。
- 2 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
2149	HKT-247	262.31㎡	262㎡	2021年4月26日～8月31日

- 3 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課文化財主事）、実測は担当者、技能員の坂口剛毅・藤野雅基が行い、製図は資料整理補助職員の鳥井幸代が行った。
- 4 遺物の写真撮影は佐藤、実測は佐藤の他、技能員の棚町陽子・野村美樹・林田憲三・久富美智子、拓影は鳥井・資料整理補助職員の甲斐田嘉子、製図は佐藤の他、鳥井・野村が行った。
- 5 遺物の整理は鳥井・甲斐田が行った。
- 6 金属製品の保存処理・X線写真撮影・蛍光X線分析は埋蔵文化財センター清金良太・藤崎彩乃による。
- 7 遺構は2桁の通し番号を用い、種類に応じてSD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。
- 8 本書の青花の分類は森毅 1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九による。
- 9 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 10 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

巻頭図版目次

巻頭図版 1	中国陶磁
巻頭図版 2	朝鮮陶磁
巻頭図版 3	国産陶磁
巻頭図版 4	その他

本文目次

I	はじめに	5
1	調査に至る経緯	5
2	調査の組織	5
II	遺跡の位置と環境	5
III	調査の記録	
1	調査の概要	7
2	遺構と遺物	
(1)	遺構	7
(2)	遺物	11
IV	小結	57
付編	博多遺跡群第247次調査出土骨牌の材質(新美倫子)	60

挿図目次

第1図	博多遺跡群発掘区域図(縮尺1/8000)	5
第2図	博多遺跡群第247次調査発掘地(縮尺1/2000)	6
第3図	博多遺跡群第247次調査遺構配置図(縮尺1/100)	8
第4図	土坑1(縮尺1/40)・溝(縮尺1/60)・埋納土坑(縮尺1/20)実測図	10
第5図	井戸(縮尺1/60)・土坑2・石積土坑1実測図(縮尺1/40)	11
第6図	石積土坑2実測図(縮尺1/40)	12
第7図	井戸SE31・溝SD29(1)出土遺物実測図(縮尺1/3)	13
第8図	溝SD29(2)・30出土遺物実測図(縮尺1/3)	15
第9図	溝SD37出土遺物実測図(縮尺1/3)	16
第10図	土坑SK01出土遺物実測図(縮尺1/3)	17
第11図	土坑SK02・04・05・06(1)出土遺物実測図(縮尺1/3)	18
第12図	土坑06(2)出土遺物実測図(縮尺1/3)	19
第13図	土坑SK09出土遺物実測図(縮尺1/3)	20
第14図	土坑SK12・13(1)出土遺物実測図(縮尺1/3)	21
第15図	土坑SK13(2)・14・16出土遺物実測図(縮尺1/3)	22
第16図	土坑SK17出土遺物実測図(縮尺1/3)	24
第17図	土坑SK18出土遺物実測図(縮尺1/3)	26
第18図	土坑SK24・25(1)・32(1)出土遺物実測図(縮尺1/3)	27
第19図	土坑SK25(2)・32(2)・33出土遺物実測図(縮尺1/3)	28
第20図	石積土坑SX08・11・38・42出土遺物実測図(縮尺1/3)	29

I はじめに

1 調査に至る経緯

2020（令和2）年10月7日、昭和住宅株式会社から本市に対して博多区店屋町104番、105番（地番）におけるテナントビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（2020-2546）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央に位置する。埋蔵文化財課がこれを受け、同年10月28日に確認調査を行い、現地表より1.5～2.2mの間で遺構を確認した。申請者と文化財保護に関する協議をもったが、申請面積262.3㎡の内工事による影響が及ぶ262.3㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は翌2021（令和3）年4月26日から8月31日まで行われた。

2 調査の組織

発掘調査委託 昭和住宅株式会社

発掘調査受託 福岡市

発掘調査（令和3年度）

資料整理（令和4・5年度）

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課

課長

菅波 正人

菅波 正人

調査第1係長

本田 浩二郎

井上 繭子

事前審査担当

森本 幹彦（主任文化財主事）

板倉 有太（主任文化財主事）

山本 晃平（文化財主事）

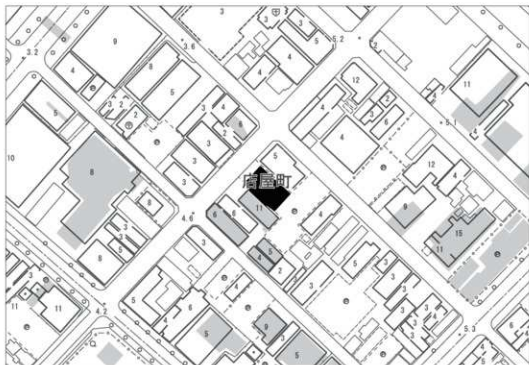
神 啓崇 三浦 萌（文化財主事）

発掘調査・資料整理 佐藤 一郎（文化財主事）

調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課管理調整係の内藤愛が行った。また、施工の日建建設株式会社、地元店屋町町内の方々のご協力により、博多遺跡群第247次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。



第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺1/8000）



第2図 博多遺跡群第247次調査発掘地 (縮尺 1/2000)

II 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。今回の調査地は遺跡の中央やや南寄り、古砂丘縁辺の入り江に面し、近辺の調査では砂丘砂は確認されていない。今回の調査地は古砂丘縁辺の入り江に面し、土地利用が戦国期以降（15世紀末～）と博多遺跡群の中では土地利用が後になる区域である。

16世紀後半の博多は自治都市化していたと『フロイス日本史』6に記されている。

1551年、大内義隆の滅亡後、大友氏が博多に代官を置いて支配する。

戦国期には各地で戦闘が恒常化し、博多の街も幾度も戦火を受けた。1559（永禄2）年 筑紫氏、1578（天正6）年 龍造寺氏、1586（天正14）年 島津氏によって街は焼かれ、荒廃した。1587（天正15）年 島津氏を降し九州を平定し終え、筑前に戻った豊臣秀吉は博多の町を検分し、石田三成・長束正家・山崎片家・小西行長らを奉行として博多の復興に当たらせた。同時に後の文禄・慶長の役（1592・1597年）を見据えた朝鮮出兵の兵站基地化も進められたが、1598年の秀吉の死によってその役割を終えた。九州平定の功により筑前国主となった小早川隆景は1589（天正17）に名島城に入り、1595（文禄4）年隆景隠居後、養子に迎えられた秀秋が後を継ぐ。関ヶ原の戦の後、秀秋は加俣され備前岡山城へ移り、代わって黒田長政が筑前国主となる。本調査地の北西150mに位置する第29次調査の他周辺の調査では17世紀初頭からの埋立立て遺構が検出されている。明和2（1765）年に成立した地誌「石城志」にみられる慶長5（1600）年の小早川秀秋、慶長18年（1613）の黒田長政の命による埋立立て記事と符合するものである。本調査地では16世紀末から17世紀初頭の遺構が掘り込まれており、それら埋立立ての範囲外ではあるが、

◇参考文献 常松幹雄 1998「博多遺跡群にみる埋立について」『福岡平野の古環境と遺跡立地』／

Ⅲ 調査の記録

1 調査の概要

12m × 20m の長方形の調査区は建設工事に先行してH鋼を1m間隔で打設し、現地表下1.5mまで重機により掘取り、残土は外部に搬出した。掘取りと並行して打設したH鋼の間に1 × 3mの鋼板を嵌め込む工法による土留を施す。調査区の長軸は周辺の地割と同じ真北から約45°西に振れている。

最初の遺構面である現地表下1.5mの(標高3.0m)上面で、16世紀末～17世紀初頭の井戸・土坑・石積土坑、下面では上面で検出漏れの遺構、16世紀後半の溝・土坑を検出した。石積土坑は南側に集中して分布していた。

2021(令和3)年4月14・15日に遺構確認面までバックホーを用いて掘取り、土砂はダンプトラックで外部に搬出した。26日午前が発掘機材、午後には借上機材を搬入し、調査区域内の土留めに沿って転落防止柵を組立てた。27日より西側2/3の調査に入る。東側1/3は残土置場とし、西側2/3の調査終了後に切り返しを行い、調査を行うこととした。遺構面を清掃し、遺構確認を行ったが、攪乱が多くみられ、その掘り上げに労を擁した。調査期間が雨期にかかり、降雨による発掘作業の中断が頻りにあり、作業工程の遅延につながった。6月10日に西側2/3のI層上面全景写真撮影、12日にはバックホーを入れ残土を調査区北西へ移動し、残り東側1/3の調査に入った。8月23日に東側1/3の全景写真撮影、その後各遺構の完掘、包含層のダメ押しを行い。8月31日の発掘機材・出土遺物・借上機材の撤収をもって調査は終了した。

2 遺構と遺物

検出遺構

井戸(第4図)

SE31 調査区の西中央で検出した。掘り方の平面形は径2.5～2.7mの不整形円形を呈し、深さ2.5mを測る。掘り方中央の検出面から1.2m下で径0.9m、深さ0.3mの瓦筒が1段検出された。さらに0.3m下位で桶側の痕跡を検出した。井筒の内側では崩落した井筒に用いられた瓦片が出土した。底面の標高0.7mを測る。

土坑(第4・5図)

SK09 調査区西端で検出した。2.1m × 1.9mの不整形円形を呈し、深さ0.65mを測る。

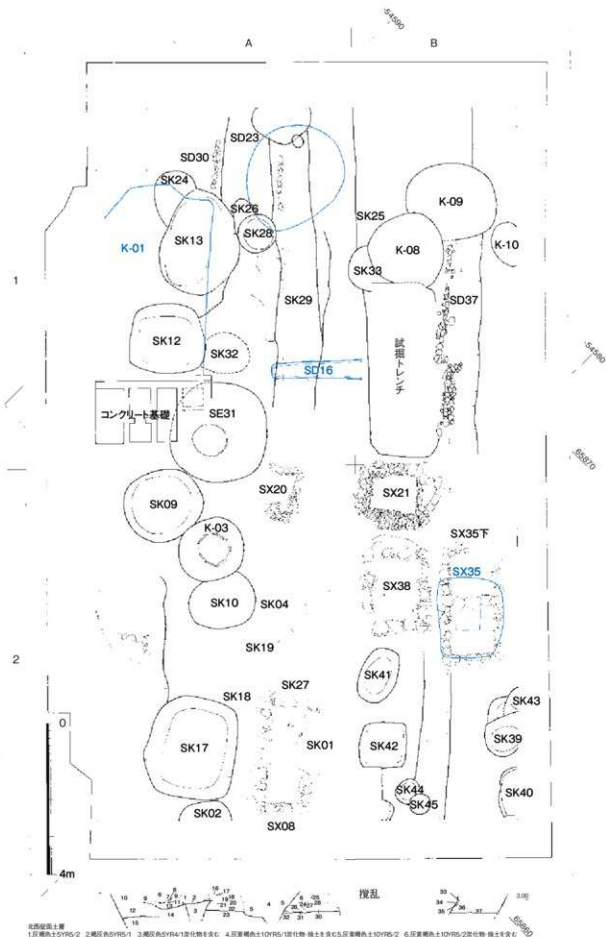
SK12 調査区北西で検出した。全長1.35m・幅1.25mの隅丸方形を呈し、深さ0.8mを測る。主軸の方位はN-45°-Wに取り、現在の町割りよりやや東に振れる。

SK17 調査区南端で検出した今回の調査で検出された遺構の中で最も新期に属する16世紀末～17世紀初頭の土坑で、SD30を切る。全長2.75m・幅2.4mの隅丸方形を呈し、深さ0.85mを測る。長軸の方位はN-40°-Wに取り、現在の町割りよりやや東に振れる。

SK28 調査区北西で検出した。遺構の北東がSK07に切られる。径1.0～1.15m前後の不整形円形を呈し、深さ0.45mを測る。

SK33 調査区北側で検出した。遺構の北東がK-08・試掘トレンチに切られる。径1.2m前後の不整形円形を呈し、深さ0.15mを測る。土師器小皿が底面から10～15cm浮いた状態で出土した。

SK39 調査区東端で検出した。北側は調査区外に掛かる。幅1.0m・検出長1.1mの不整形方形を呈し、深さ0.65mを測る。



第3図 博多遺跡群第247次調査遺構配置図(縮尺1/100)

SK41 調査区南東で検出した。全長1.5m・幅1.0m 前後の不整楕円形を呈し、深さ0.35mを測る。
SK42 調査区南東で検出した。一辺1.25の隅丸正方形を呈し、深さ0.4mを測る。主軸の方位はN-45°-Wに取り、現在の町割りと同じくする。

溝 (第3・5図)

SD29 調査区北半部で検出した。北西から南東方向に走るする幅1m・深さの溝で石積土坑SX20より南では検出されなかった。延長8mを検出した。主軸の方位はN-45°-Wに取る。

SD30 調査区北西で調査区壁面に沿って落ちの片方を検出した。北西から南東方向に縦断する。検出した幅2m・深さを測り、他の遺構や攪乱に切られ、断片での検出に留まった。延長17mを検出した。北端では溝の上端部1.4mで10～15cmの礫を並べた石列を検出した。方位はN-40°-Wに取る。

SD37 調査区の北東で検出した。調査区東側を北西から南東に縦断する遺構である。途中石積土坑SX07・11・35に切られているが、延長19mを検出した。北側では溝中央上端部で10～20cmの礫を並べた石列を西側で3.5m、東側で2.0m検出した。溝の石列間に調板の痕跡とみられる垂直な立ち上がり土層断面を確認した。また、SX07の東側に主軸を異にする石組があり、SD37に伴う可能性がある。方位はN-40°-Wに取る。

埋納土坑 (第5図)

SX35 調査区東側で検出した。壁面が垂直立ち上がり、四隅が鋭く直角をなし、全長0.9m・幅0.6m・検出面からの深さ0.15mの木箱の痕跡とみられる。底面から5～20cm浮いた状態で、土師器小皿・杯他が出土した。主軸の方位はN-45°-Wに取る。

石積土坑 (第5図)

SX08 調査区南側で検出した。検出部分で石積内法の残存長1.0m・幅0.8m・深さ0.4m、掘方残存長1.6m・幅1.9mを測る。腰石は20cm×40cmほどの立方体に近い石材を用い、その上に形状・大きさが不揃いな礫を積み上げている。北西の石積は失われ、SX27に近接している。方位はN-45°-Wに取る。

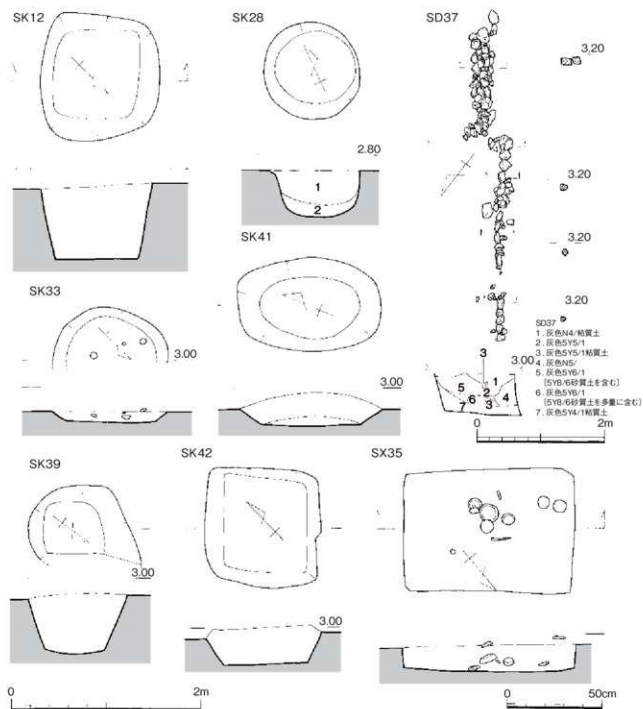
SX20 調査区中央部で検出した。検出部分で石積内法の長さ0.7m・幅0.8m・深さ0.4mを測る。小振りな礫を密に積み上げる。掘方は確認できなかった。方位はN-45°-Wに取る。

SX21 調査区中央部で検出した。南東辺がSX11と近接する。石積内法の長さ1.4m・幅1.0m・深さ0.8mを測る。掘方は確認できなかった。北東辺の壁面は立方体に近い扁平な石材を用い、他の3辺は小振りで不整形な礫を積み上げている。主軸の方位はN-45°-Wに取る。

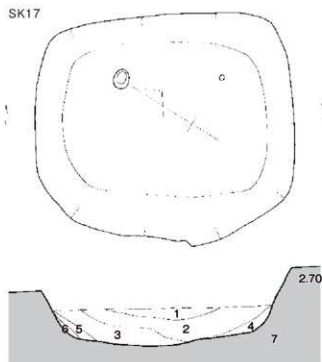
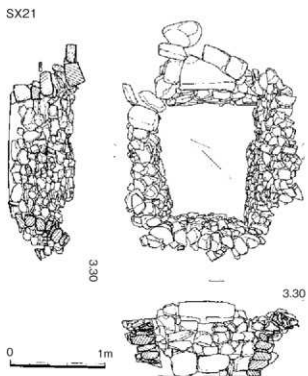
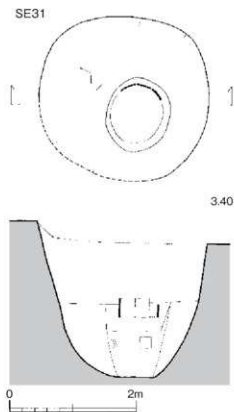
SX27 調査区南側で検出した。検出部分で石積内法の長さ0.9m・幅0.6m・深さ0.4m、掘方残存長1.5m・幅1.4mを測る。東側半部が失われている。方位はN-45°-Wに取る。

SX35下 調査区東側、SX35下面で検出した。南西辺がSX11と近接する。北隅の石組が失われている。石積内法の長さ2.7m、幅1.0m、深さ0.6m、掘方の長さ3.3m・幅1.8mを測る。腰石は40cm×30cmほどの立方体に近い石材を用い、その上に形状・大きさが不揃いな礫を積み上げている。長軸の中央で大きな石で仕切りを形成している。方位はN-45°-Wに取る。

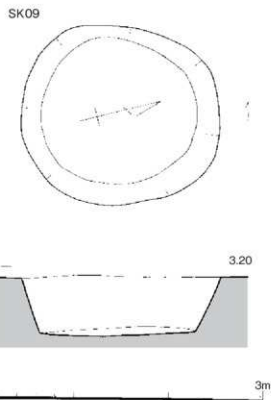
SX38 調査区東側で検出した。北西辺がSX07、北東辺がSX35と近接する。石積内法の長さ1.6m・幅1.2m・深さ0.5mを測る。要所要所に安定した石材をすえ、その間隙に不整形のやや小さな礫を積んでいる。方位はN-45°-Wに取る。



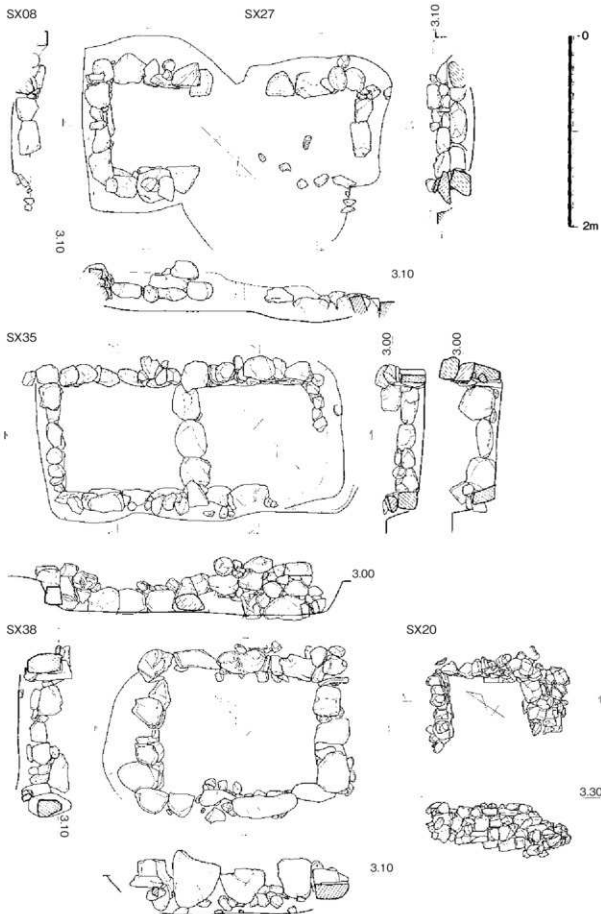
第4図 土坑1 (縮尺 1/40)・溝 (縮尺 1/60)・埋納土坑 (縮尺 1/20) 実測図



- SK17
1. 灰色7.5Y5/1砂粘質土
 2. 灰色N4/砂粘質土(炭化物を含む)
 3. 灰色5Y5/1砂粘質土(5YB/2砂ブロックを含む)
 4. 灰色N4/砂粘質土
 5. 灰色N4/砂粘質土
 6. 灰色5Y6/1砂質土
 7. 灰オリーブ色5Y6/2砂質土



第5図 井戸(縮尺1/60)・土坑2・石積土坑1実測図(縮尺1/40)

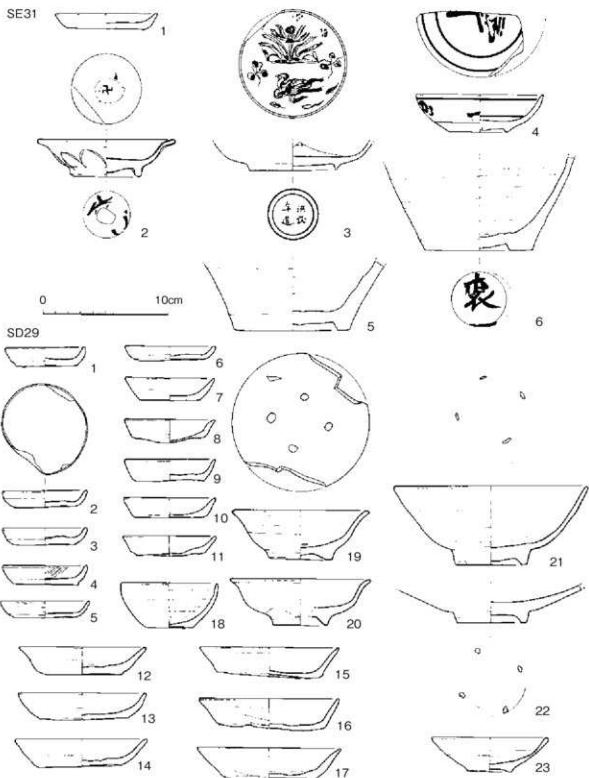


第6図 石積土坑2実測図 (縮尺 1/3)

出土遺物

SE31 出土遺物（第7図）瓦類は第27図、漆器は第39図参照。

土師器 小皿(1)底部は回転糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ。口径8.2cm・器高1.3cmを測る。



第7図 井戸 SE31・溝 SD29 (1) 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

青磁 杯 (2) 体部は丸みを持って内湾気味に立ち上がる。上位で緩く屈曲し折縁の口縁部となり、端部をわずかに上に引き出す。体部外面には錆のない蓮弁をヘラ彫りする。内底見込みに印文を施すが、不鮮明である。高台は断面四角形で、内外とも丸く面取りする。全面施釉後、外底高台内の軸を輪状にカキ取る。外底の露胎部分に墨書が記されているが、判読は不明である。

青花 皿 (3・4) 3は口縁部が欠失し、底面は内外とも平坦で、内底見込みに蓮池水禽文を描き、高台内に年款「洪武年造」を記す皿 IIIa である。高台畳付は軸をかき取り露胎とし、砂が付着している。4は内底に寿老人を描く葵筒底の皿 Ia で、外底削り込みの側面まで施釉する。

陶器 壺 (5・6) 外底の内側を削り込み葵筒底状にする底部片で、体部外面は施釉、6の外底には墨書を記す。

SD29 出土遺物 (第7・8図)

土師器 底部の切り離しは糸による。小皿 (1~11) 1~4・6~8・10・11は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径6.4~7.5cm・器高1.2~1.9cmを測る。2は口縁端部に煤が付着し、器周の1/6が直線状となり、磨滅すると円が欠けた形状を呈する。4は体部内面の一部にヘラナデの痕跡がみられる。5・9は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径7.2・7.3cm・器高1.4・1.7cmを測る。

杯 (12~17) 12・14~17は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径10.1~11.5cm・器高2.2~2.6cmを測る。13は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径10.2cm・器高2.1cmを測る。16・17は体部外面下半まで切り離しの糸の痕跡が残る。

小椀 (18) 体部から口縁部まで丸みを持ち、口縁部が直立する平底の椀で、体部外面から内底まで回転横ナデ、内面下半にはロクロ目が明瞭に残る。口径7.8cm・器高3.6cmを測る。

白磁 (朝鮮) 杯 (19・20) 体部中位で緩く屈曲し、外反する口縁部が延びる。高台は断面台形に削り出す。外面の屈曲部より下は回転ヘラ削り、その他の部位は回転横ナデを施す。19の胎土は細かい砂粒を多量に含み、灰白色 (2.5Y8/2) を呈し、化粧土、灰白色 (2.5Y8/2) 透明の軸を全面に掛け、畳付の軸を掻き取る。内底には胎土目が残る。20の胎土は灰白色 (5Y8/1) で、灰白色 (5Y7/1) の軸体部外面下半まで掛ける。畳付に胎土目が残る。

碗 (21) 丸みを持つ体部から口縁部が直線的に延びる。内底は平坦で、体部との境は明瞭でない。断面台形の高台は内側の削り出しが浅く、底部が厚い。灰色微粒子を多量に含む灰白色 (5Y7/1) の胎土に、灰白色 (5Y9/1) の透明軸を全面に掛け、細かい貫入が入る。内底と高台畳付には砂目が残る。21は口縁部が欠失する高台付皿で、竹節高台から体部が水平に近い角度で外に延びる。

皿 (22) 口縁部を浅く削り、高台と底部の境は不明瞭である。白色微粒子を多量に含み、明赤褐色 (5YR5/6) を呈する胎土に、明赤褐色 (5YR4/3) の軸を掛け、高台畳付の軸を掻き取る。

青花 皿 IIa (24・25・26) 端反りの高台付皿で、高台畳付の軸を掻き取る。24は口縁部内面に三重博文帯をめぐらせ、体部外面には蓮華唐草文を描く。25は体部外面に七宝唐草文、内底の中心に捻花文、周囲に宝相華、牡丹唐草文を描く。26は体部内面に花卉を丸彫りし、内底には麒麟を描く。

青磁 碗 (27) 線描きの細い蓮弁文の口縁部片で、体部内面下位にも線描き文様の断片がみられる。陶器 すり鉢 (28) 肥厚する口縁部が体部との境から屈曲し、口縁部内面からすり目をヘラで一本描きする。体部下半以下は欠失している。灰褐色の胎土に黒褐色の軸を掛ける。

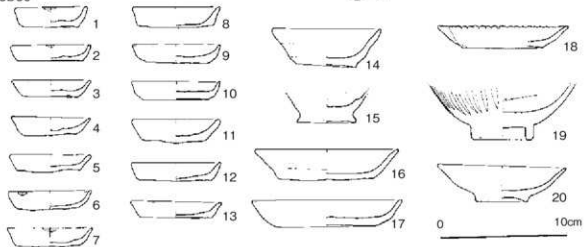
土師器 鍋 (29) 丸みを持つ体部から口縁部までほぼ直線的に延びる。口縁部と体部の境に屈曲はない。外面は縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目を施す。底部は欠失している。

すり鉢 (30) 体部から口縁部まで直に延び、口縁部が肥厚する。口縁端部は平坦におさめ、外傾する。外面は縦方向のハケ目、体部の中位と下位に指頭圧痕が残る。内面には横方向のハケ目の後、一単

SD29

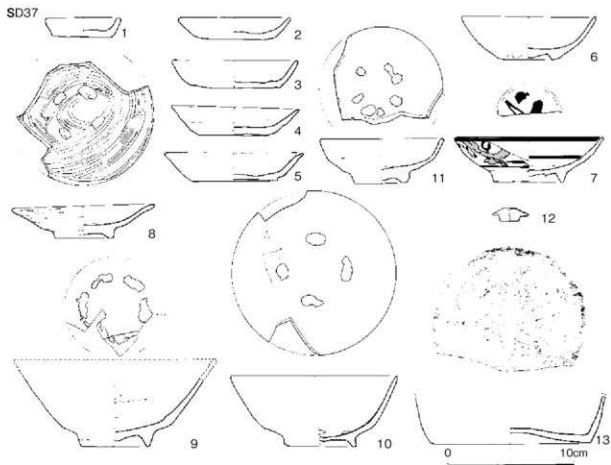


SD30



第8図 溝SD29(2)・30出土遺物実測図(縮尺1/3)

位5本のすり目を飾描きする。底部は欠失している。



第9図 溝SD37出土遺物実測図(縮尺1/3)

瓦質土器 湯釜 (31) 口縁部が直立し、体部外面中位に断面半円形でやや下方に垂れた罫をめぐらす。肩部には木口で刻み目を入れた双耳を貼り付け、その上位には二連竹管文を入れる。口縁部内面から外面は体部上半にかけて横ナデ、体部下半はハケ目、内面は体部上半をナデ、下半は横ナデ調整である。底部は欠失している。

SD30 出土遺物 (第8図)

土師器 小皿 (1～13) 底部の切り離しは糸による。1・10は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径5.8・7.1cm・器高1.6・1.5cmを測る。2～9・11～13は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径6.3～7.3cm・器高1.3～1.9cmを測る。1・2・6・7は口縁端部に煤(油煙)が付着する。

杯 (14～18) 底部の切り離しは糸による。体部外面から内底まで回転横ナデを施す。14は口径8.6cm・器高3.0cmを測り、口径が小さく、器高が高めの杯である。15は口縁部が欠失している。平底の底部端が外に張り出す。内面のロクロ目が鋭く残る。16・17は口径11.4・11.9cm・器高2.5・2.1cmを測る。18は磁器菊皿を意識したものか。口縁部を細かく花卉状に刻む。

青磁 碗 (19) 線描きの細連弁を施す体部下半片で、体部内面下位にも線描きの文様を施す。

雑釉陶器 皿 (20) 外底の削りが浅く、高台と底部の境は不明瞭である。白色・黒色微粒子を含む灰色(7.5Y6/1)の胎土に灰色(7.5Y5/1)透明釉を全面掛け、内底に白色耐火土、畳付に砂目跡が残る。

SD37 出土遺物 (第9図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。

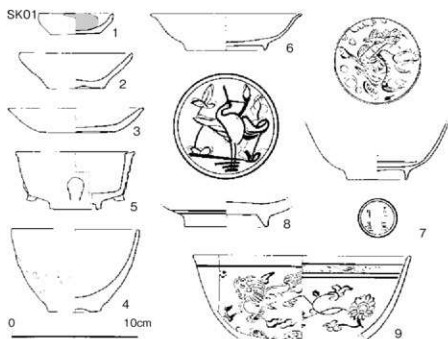
小皿 (1) 体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.0cm・器高1.6cmを測る。

杯(2~5) 2・3は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径8.9・10.0cm・器高1.8・2.2cmを測る。4・5は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径10.3・10.5cm・器高2.2cmを測る。

白磁皿(6) 萁筒底の半球形の皿で、外底割り込みの側面まで施軸する。

青花碗IIb(7) 高台脇~高台表面が露胎の粗製浅碗で、体部外面と見込みに粗雑な花文を描く。

粉青沙器 刷毛目皿(8) 体部下位で屈曲し、やや外



第10図 土坑SKO1出土遺物実測図(縮尺1/3)

反する口縁部が延びる。高台は外側を直に、内側を浅く斜めに削り出し、断面台形を呈する。体部外面の屈曲部から内底まで回転横ナデ、屈曲部より下は回転ヘラ削りを施す。内底には目跡が残る。胎土には黒色微粒子を含み、灰白色(10Y6/1)を呈する。体部外面から内底まで白化粘土を刷毛塗りし、細かい貫入が入る透明軸が全面に掛けられる。口径11.4cm・器高2.5cm・高台径4.7cmを測る。

刷毛目碗(9) 体部と接合しない口縁部片も出土した。体部下位で屈曲し、口縁部が直線的に外上方に延びる。内面の体部と底部の境に段が付き、内底には目跡が残る。高台は畳付が2mmと狭く、断面三角形を呈する。胎土には直径2mm未満の砂粒、白色微粒子を多量に含み、紫灰色(5RP5/1)を呈する。体部は内外面とも白化粘土を刷毛塗りし、灰色(10Y5/1・4/1)の軸を全面に掛ける。

粉青沙器 粉引碗(10) 体部下位で屈曲し、口縁部が直線的に外上方に延びる。内面の体部と底部の境は不明瞭で、内底には目跡が残る。断面台形の高台は細く、やや外に開く。体部外面の屈曲部から内底まで回転横ナデ、屈曲部より下は回転ヘラ削りを施す。胎土は紫灰色(5P6/1)を呈する。細かい貫入が入る透明軸が全面に掛かり、軸下は白化粘土掛け、口径13.2cm・器高5.9cm・高台径5.8cm。

陶器 皿(11) 体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に延びる。竹節高台を削り出し、内底に目跡が残る。白色微粒子を含む胎土は灰白色(10Y7/1)を呈する。オリーブ灰色(10Y6/2)軸を全面に掛ける。

瓶(13) 体部下位が残存する船徳利で、底部は平底で、内面には当て具痕が振花状に残る。

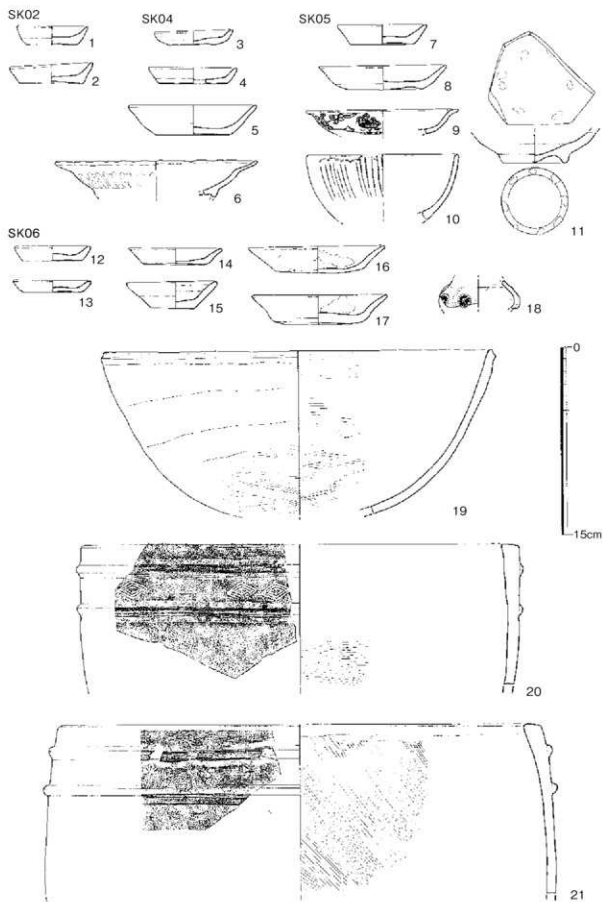
白磁 小壺蓋(12) 無頸小壺の栓状蓋である。

SKO1 出土遺物(第10図)

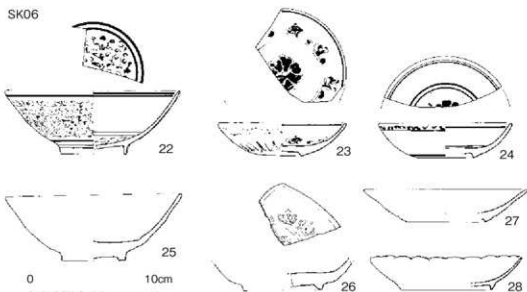
土師器 特小皿(1) 底部は回転糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.0cm・器高1.6cmを測る。内面と口縁端部外面には炭素が吸着している。

杯(2・3) 底部は回転糸切り離し、2は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径9.0cm・器高2.9cmを測る深めの杯である。3は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径10.8cm・器高1.9cmを測る。

肥前陶器 碗(4) 内湾する体部から口縁部が直線的に延び、高台は低く、体部との境は不明瞭で、



第11图 土坑 SK02-04-05-06 (1) 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)



第12図 土坑SK06(2)出土遺物実測図(縮尺1/3)

内側の削りは浅い。暗褐色(7.5Y3/3)の胎土に、暗オリーブ色(9.5Y4/3)にぶい黄橙色(10YR7/2)の釉を掛ける。

青磁 香炉(5) 足の残存は1個であるが、筒型の三足香炉とみられる。体部から口縁部まで直立し、外面には凹線をめぐらす。口縁端部は内側に折れ、上面はわずかにくぼむ。

白磁 皿(6) 端反り高台付皿で、高台畳付は内側が接地、外側が跳ね上がり、露胎となっている。

青花 碗IV(7) 口縁部が欠失、平坦な内底見込みに麒麟を描き、高台内に年款「宣徳年造」を記す。

皿IIb(8) 内底に鷲文を描く粗製の底部で、断面台形の高台は外面を直、内面を斜めに削り出し、畳付には砂が溶着する。

五彩 碗(9) 口縁部内面に三重の直線を斜めに交差させた三重襷文帯をめぐらせ、体部外面は獅子と雲気文、内面には菊花唐草文を描く。軸下は青花で外郭線を描き、軸上の外面の獅子は朱色、雲は黄緑色に、内面では花びらとつぼみは朱色、花の中心と葉は黄緑色に塗りつぶす。胎土は緻密で白色を呈し、無色透明の釉を掛ける。底部は欠失し、器周囲残存1/7の復元口径17.2cmを測る。

SK02 出土遺物(第11図)

土師器 小皿(1・2) 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径5.7・6.6cm・器高1.5cmを測る。

SK04 出土遺物(第11図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿(3・4) 口径6.3・7.0cm・器高1.1・1.3cmを測る。杯(5) 口径10.2cm・器高2.4cmを測る。

白磁 皿(6) 口縁部が罌状に広がる。口縁部周縁を輪花状にし、型作りで体部内外面に細い花卉を凹凸で表す。SK05出土片と接合した。

SK05 出土遺物(第11図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿(7) 口径7.0cm・器高1.6cmを測る。杯(8) 口径10.0cm・器高1.9cmを測る。

青花 皿IIa(9) 端反りの高台付皿で、底部は欠失している。体部外面に八宝唐草文を描く。

青磁 碗(10) 外面に線描きの細い蓮弁文を施す。底部は欠失している。

白磁 皿(11) 口縁部が罌状に折れ、周縁を輪花状にする。体部内外面に細い花卉を凹凸で表現する。

SK06 出土遺物 (第11・12図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿 (12~14) 口径6.0~7.4cm・器高1.0~1.3cmを測る。特小皿 (15) 口径7.1cm・器高1.9cmを測る。12~14の一群より器高が高く、底径が小さい。杯(16・17)口径10.7cm・器高2.1・2.3cmを測る。鍋 (19) 内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。内面はハケ目、外面は口縁部から体部上半までナデ、下半は不定方向のハケ目を施す。SX21 出土片と接合した。

瀬戸美濃系陶器 小壺 (18) 瀬戸鉄釉小壺の体部片で、外面を堆線で画しその間に菊花文を配する。

瓦質土器 鉢 (20・21) 20は体部から口縁部にかけてほぼ直立する。口縁部外面に2条の突帯、その間に印花により入子菱文をめぐらす。21は体部から口縁部にかけて僅かに内湾して直立する。内面はハケ目、外面はナデ調整を施し、口縁部外面に2条の突帯、その間に印花により撫子文をめぐらす。

青花 碗 (22) 内湾する体部から口縁部が直線的に開き、底部が高台内にくぼむ蓮子碗で、体部外面と内底見込みに梵文を描く。

皿 (23・24) 基筒底の皿で、口縁部外面に簡略化した波濤文帯をめぐらせ、内底見込みに捻花文、23は精製の1aで、体部下半に蕉葉文を描く。24は粗製の1bである。

白磁(朝鮮) 碗 (25) 体部の下位で屈曲し、丸みを持つ体部から口縁部が直線的に延びる。内底は平坦で中心部が僅かに突出し、体部との境に段が付く。断面四角形の高台は内側の削り出しが浅く倒傘状をなし、底部は厚い。胎土には黒色・白色微粒子を多量に含み、灰白色(7.5Y8/1)を呈する。明緑灰色(10GY7/1) 透明の釉が全面に掛けられ、細かい貫入が入る。高台畳付に砂目が5ヶ所残る。

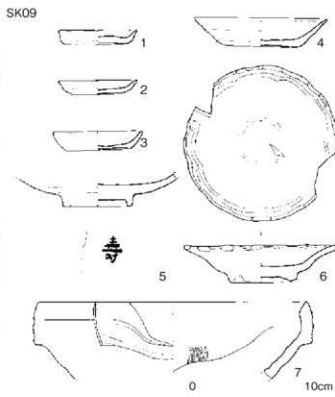
粉青沙器 象嵌杯 (26) 口縁部が欠失している。内底見込みに白象嵌で、2重の圈線、その周縁に如意頭文を配する。内側にも文様もしくは銘が施されているが、残存部位が僅かで詳細は不明である。幅狭で低い高台を削り出す。胎土は灰色(7.5Y6/1)を呈し、灰色(10Y6/1)の釉を全面に掛けた後、畳付の釉をかき取り露胎とする。

白磁 皿 (27) 底部の中心部が欠失している。高台を低く削り出し。内側が接地、外側が跳ね上がる。胎土は淡黄色(2.5Y8/3)を呈し、灰白色(2.5Y8/2)の釉を内外面とも体部中位まで掛ける。青磁 皿 (28) 型打ち成形による。口縁部を輪花に切り出す裏白の皿である。

SK09 出土遺物 (第13図)

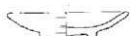
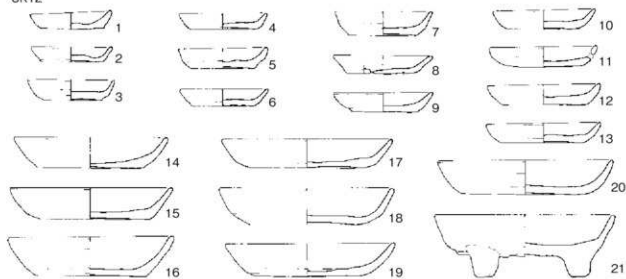
土師器 小皿 (1~3) 底部は回転糸切り離し、1・3は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.2・7.0cm・器高1.1・1.5cmを測る。2は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残り、口径6.2cm・器高1.1cmを測る。口縁部に煤が付着している。

杯 (4) 底部は回転糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径10.5cm・器高2.3cmを測る。



第13図 土坑SK09出土遺物実測図(縮尺1/3)

SK12

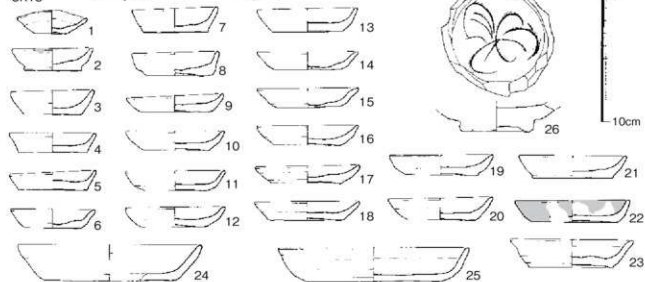


24

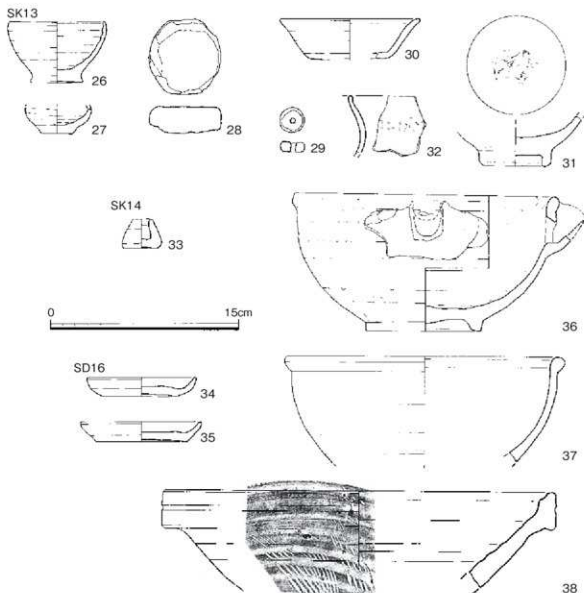


25

SK13



第14图 土坑SK12-13 (1) 出土遺物実測図 (縮尺1/3)



第15図 土坑SK13(2)・14・16出土遺物実測図(縮尺1/3)

青磁碗(5) 断面四角形の高台内側の削りが浅く、底部は厚い。内底に高台と同じ範囲をカキ取り露胎とする。外底に墨書「壽」を記す。

皿(6) 腰折れの皿で、口縁部内面に稜花をヘラ彫りする。口縁端部に弧状の切り込みを入れるが、稜花と対応していない。

備前焼 すり鉢(7) 口縁部破片資料で、口縁帯は薄板作りで、端部は内傾し、外面には凹線を3条めぐらせ、口縁下内面の残存部位にはすり目が入る。

SK12 出土遺物(第14図)

土師器 底部の切り難しは回転糸による。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿(1~13) 口径6.5~9.0cm・器高1.2~2.0cmを測る。8は底部、11は体部に穿孔がある。

杯(14~20) 口径12.2cm~13.8・器高2.4~3.1cmを測る。

三足杯(21) 杯部は体部が回転横ナデ、内底はナデ、口径14.2cm・器高3.4cmを測る。底端に高さ2.0cm・径1.6cmの円柱状の足を貼付する。

瓦質土器 すり鉢 (22・23) 22 はすり目が摩耗によりほとんど失われ、口縁部にハケ目が残る。23 は体部下半片で、7 条単位のすり目を入れる。

白磁 皿 (24) 高台をアーチ状に削り込み 4 分割し、接地面を減じる。全面に施釉され、内底に 4 ヶ所の目跡が残る。

青磁 碗 (25・26) 内面に蓮華文を片彫りする龍泉窯系無文画花碗 I-2 類である。

SK13 出土遺物 (第 14・15 図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿 (1～23) 口径 5.5～9.6cm・器高 1.3～2.2cm。杯 (24・25) 口径 14.5・15.0cm・器高 2.9・2.7cm。

深杯 (26) 内面はロクロ目が鋭く残る。

陶器 小壺 (27) 口縁部が欠失している。

瓦玉 (28) 平瓦片を再加工し円板にした土製品である。

有孔円板 (29) 径 1.9cm・高さ 0.9cm の土製円板の中央に径 3mm の径を穿つ。

白磁 皿 (30) 全面に施釉の後、口縁部の釉をかき取った口禿の皿である。

青磁 碗 (31) 腰が張らない碗の体部下半以下片、見込みに印花文を施し、高台内側まで施釉する。

粉青沙器 象嵌壺 (32) 内湾する体部から口縁部が直立する。外面の口縁部下に 2 条の圈線、その下に竹管文をめぐらせ、白象嵌を施す。底部は欠失している。

SK14 出土遺物 (第 15 図) 検出時に土坑出土として取り上げたが、その後 SE31 井戸枠上面と判明。

土師器 小壺 (33) 截頭円錐形を呈し、体部外面横ナデ、内面ナデ、糸切底との境を面取りする。

SD16 出土遺物 (第 15 図)

土師器 小皿 (34・35) 底部は回転糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 8.6・9.6cm・器高 1.4・1.9cm を測る。

肥前陶器 片口鉢 (36・37) 36 は U 字形の注口を持つ。37 は注口・底部を / 欠失する。

備前焼 すり鉢 (38) 口縁部が厚く、立上りは低い。体部内面には斜め方向のすり目を入れる。

SK17 出土遺物 (第 16 図) ガラス製品・金属製品・木製品は第 32・37～39 図参照。

土師器 小皿 (1～14) 1・6・8・9・11～13 は底部の切り離しが回転糸切り離し、2～5・7・10・14 は静止糸切り離しによる。1・2・4～7・10～14 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 6.2～7.6cm・器高 1.2～1.6cm を測る。2・6・10・12 は口縁端部に煤が付着、4 は片口状の切り込みが入る。7 は内底に指頭圧痕が残る。3・8・9 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る、口径 6.5～7.3cm・器高 1.2～1.5cm を測る。7 は底部が薄く、9 は口縁端部に煤が付着、11 は器肉が非常に厚い。

杯 (15～21) 15・20・21 は回転糸切り離し、16～19 は静止糸切り離しによる。15～17・19・20 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 9.4～10.6cm・器高 1.9～2.3cm を測る。17 は口縁端部を片口状にし、内底には指頭圧痕が残る。19 は口縁端部に煤が付着する。18・21 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る、口径 10.1・11.2cm・器高 2.0・1.8cm を測る。

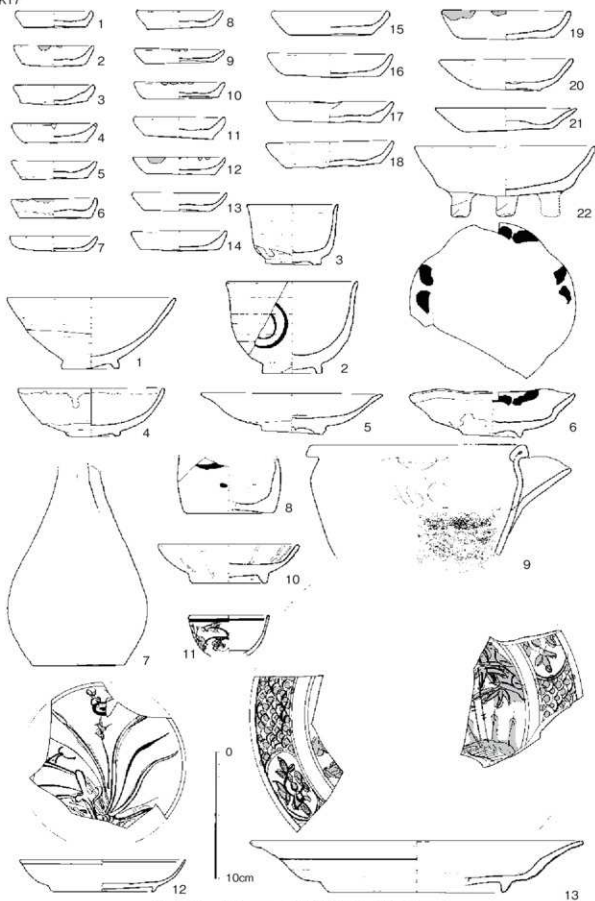
三足杯 (22) 杯部は体部が回転横ナデ、内底はナデ、口径 14.4cm・器高 4.0cm を測る。底端部のやや内側の高さ 2.0cm・径 1.5cm の円柱状の足を貼り付ける。足が 1 個欠失するが、三足とみられる。

陶器 碗 (1) 竹節高台から外上方に体部が延びる灰釉碗で、浅黄橙色 (75YR/4) の胎土にオリープ黄色 (5Y6/3) の釉を体部外面中位まで掛ける。

肥前陶器 内面から体部外面下位まで回転横ナデ、以下は回転ヘラ削り、低い竹節高台を削り出す。釉は体部外面下位の回転横ナデと回転ヘラ削りの境まで掛ける。

碗 (2) 高台から上方に体部が延び、口縁部は外反する。灰色 (75Y6/1) の胎土に灰色 (75Y6/1)

SK17



第16图 土坑SK17出土遗物实测图(缩尺1/3)

不透明の釉を掛け、体部外面には鉄絵で◎を描く。

小碗 (3) 碗2を小型化したものである。灰色(75Y6/1)胎土に灰色(75Y5/1)透明釉を掛ける。

皿(4・5)4は底部から口縁部にかけて内湾する体部を持つ「皮鮫手」丸皿である。橙色(75Y7/1)の胎土に灰白色(75Y7/1)の薬灰釉、口縁端部はオリブ黒色(75Y3/1)の鉄釉を掛ける。5は緩やかに内湾する体部から外反する口縁部が延びる端反り皿である。内底に胎土目が残る、段は付かない。灰黄色(25Y7/2)の胎土にオリブ褐色(25Y4/3)の釉を掛ける。

向付(6)緩やかに内湾する体部から屈曲し、内湾気味の口縁部が延びる。平面形は木瓜形を呈し、弧状に突出した口縁部内面に鉄絵で文様を施す。灰白色(N8/)の胎土に灰白色(75Y7/1)の釉。

瓶(7・8)7は口縁部が欠失する徳利で、暗青灰色(10BG4/1)の胎土に灰オリブ色(75Y6/2)の釉を全面に掛け、かいらぎ状のちぢれがある。底部は平底で、貝目が残る。8は体部下半が残存、底部は上げ底、灰色(75Y6/1)の胎土に灰白色(75Y7/1)の釉を掛け、体部外面には鉄絵を施す。

片口鉢(9)叩き成形により、体部内面には同心円の当て具痕が残る。灰褐色(5YR6/2)の胎土に内面がぶい赤褐色(5YR5/3)、外面がぶい橙色(75YR6/3)に発色した釉を掛ける。

青磁 皿(10)内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。体部内外面にヘラで縦方向の分割線を入れる。全面施釉後、外底高台内の釉を輪状にカキ取る。

青花 小杯 III(11)内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。底部は欠失している。体部外面に唐草文を描く。復元口径6.4cmを測る。

皿 IIIa(12)口縁部が内湾する高台付皿で、高台は細く畳付の釉をカキ取る。内底に蓮池文を描く。

大皿 IIIb(13)漳州窯系の芙蓉手鈎大皿で、口縁部内面は地文に青海波地文、窓縁中に十字唐花文、内底には花鳥文を描く。高台は断面台形で、畳付には砂が付着し、外底は露胎となっている。

SK18 出土遺物 (第17図)

土師器 杯(1~3)体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕。1・3の底部は静止糸切り、口径9.7・11.7cm・器高1.6・2.1cmを測る。2の底部は回転糸切り、口径11.2cm・器高2.1cmを測る。

肥前陶器 碗(4・5)体部が内湾し、4は口縁部欠失、竹節高台はやや外に開く。灰褐色(75YR6/2)の胎土に釉を高台脇まで掛け、外面が黒褐色(75YR3/2)、内面は黒色(75YR7/1)に発色する。5は口縁部が内湾気味に延び、短く開く。高台は低く、体部との境は不明瞭で、内側の削りは浅く、中央部がわずかに突出する。体部外面に鉄絵(暗褐色2.5YR3/3)で文様を施す。胎土は明褐色(75Y7/1)、外面の露胎し酸化した部位は橙色(75Y6/2)を呈する。灰オリブ色の釉を体部下半まで掛ける。

皿(6)緩やかに内湾する体部から外反する口縁部が延びる端反り皿で、口縁部をなぶり口にする。内底には胎土目が残る、段は付かない。竹節高台の内側の削りは浅く

甕(12)逆L字形口縁で、頸部と体部の境に段が付く。胎土は1mm未満の白色砂粒を含み、明赤褐色(25YR5/8)、外表から2mmの範囲は還元により赤灰色(25YR5/1)を呈する。全面に掛けられた黒褐色(10YR3/2)～灰黄褐色(10YR4/2・5/3)の釉は所々にムラがある。

青花 碗 I(7)饅頭心碗の底部片で、内底に如意雲を描き、高台内に吉祥句「萬福攸同」を記す。

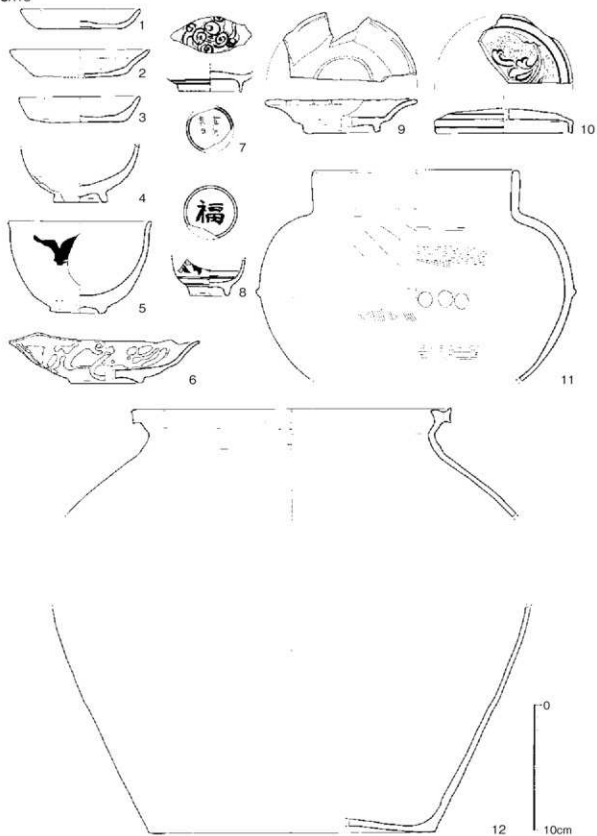
五彩 小杯(8)口縁部が欠失し、体部外面に唐草文を配し、内面には「福」を記す。

青磁 皿(9)腰折れの稜花皿で、口縁部内面に稜花に沿った線をヘラ彫りする。

合子蓋(10)天井部から口縁部が直に折れ、天井部に折枝文、周囲に木口による刺突文を施す。

瓦質土器 湯釜(11)口縁部が直立し、体部外面中位に断面半円形の鐏をめぐらす。肩部に貼付されたとみられる双耳は、残存部位では確認できなかった。底部は欠失する。外面は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面は上半が斜め方向のナデ、中位は横ナデ、下半は縦方向ハケ目後横ナデで、煤が

SK18



第 17 図 土坑 SK18 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

付着している。内面上半は横方向のハケ目、肩部はその後ナデ消し、中位は罫を貼り付けた際に付いた指頭圧痕を横ナデで調整している。下半の中位近くは横ナデ、底部近くは横方向のハケ目が残る。

SK24 出土遺物 (第18図)

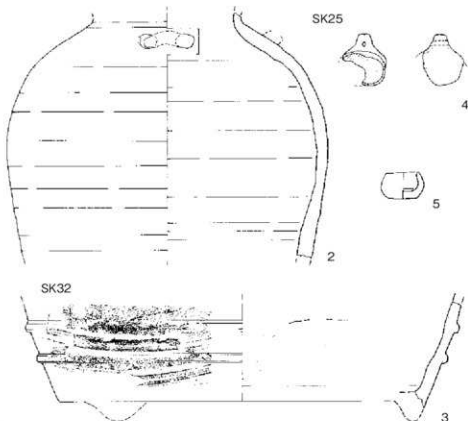
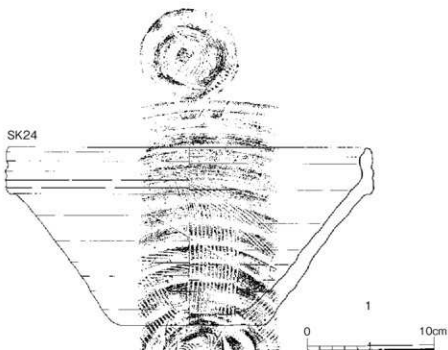
備前焼 すり鉢 (1)
口縁帯は薄板作りで、外面に3条の凹線、体部内面に斜め方向のすり目、見込みにもすり目を入れる。

耳壺 (2) 口縁部と体部下半が欠失する。1/2が残る肩部に横耳の基部が1カ所残る。三耳壺であろう。

土鈴 (3) 内面上位にしほり痕、中位以下に指頭圧痕が残る。

土師器 小壺 (4)
薬壺形の無頸壺で、内外面とも口縁から体部まで横ナデ、底部はナデを施す。

瓦質土器 鉢 (5)
体部下位が残存し、内面はハケ目、外面はナデ調整を施し、外面の底部付近に2条の突帯をめぐらす。



第18図 土坑 SK24・25 (1)・32 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

SK25 出土遺物 (第18・19図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。小皿 (1・2) 体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.1・7.2cm・器高 1.5・1.3cm を測る。2 は口縁端部に煤が付着する。

杯 (3) 体部外面から内底まで回転横ナデ、口径11.3cm・器高2.3cmを測る。

粉青沙器 印花繩文瓶 (4) SK26・A-1 I層出土の破片と接合した。

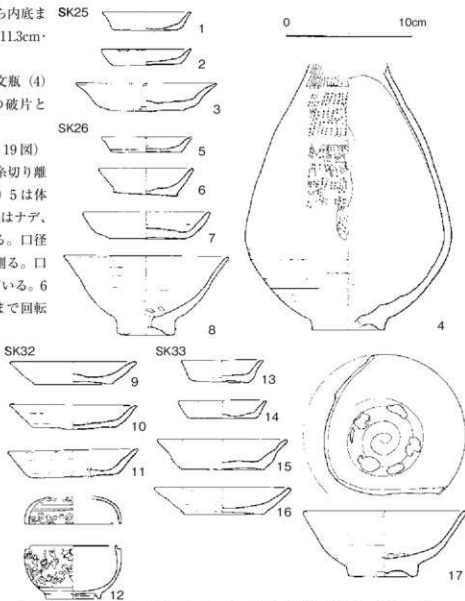
SK26 出土遺物 (第19図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。小皿 (5・6) 5は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径7.2cm・器高1.2cmを測る。口縁端部に煤が付着している。6は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径7.5cm・

器高2.1cmを測る深めの小皿である。

杯 (7) 体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径10.2cm・器高2.2cmを測る。

粉青沙器 粉引碗 (8) 内湾する体部中で屈曲し、外反する口縁部が延びる。内底と畳付に砂目が残る。高台外側を竹



第19図 土坑SK25 (2) 26・32・33・42 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

節に、内側は丸くくはむように削り出す。淡黄色 (25Y8/3) の胎土に灰黄色 (25Y7/2) 透明の釉を全面に掛け、釉下には白化粧土を掛ける。二次被熱により釉の大半が剥離している。

SK32 出土遺物 (第19図)

土師器 杯 (9~11) 底部は回転糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径10.2~10.4cm・器高1.8~2.1cmを測る。

五彩 合子 (12) A-1・2 I層出土の破片と接合した。蓋の天井部と口縁部の境に圏線を配し、天井部と口縁部外面に唐草文をめぐらせる。全面施釉の後、蓋の口縁部内面の釉をかき取り露胎とする。身は蓋受けの返りと高台畳付の釉をかき取り露胎とする。体部外面に蓮華文をめぐらせ、体部と底部の境に圏線をめぐらす。釉下は青花、釉上は朱色と黄緑色の顔料で描く。

SK33 出土遺物 (第19図)

土師器 底部は回転糸切り離しによる。小皿 (13・14) 体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.5・7.0cm・器高1.8・1.5cmを測る。

杯 (15-16) 体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 10.4・10.9cm・器高 2.4・2.2cm を測る。

白磁 (朝鮮) 碗 (17) 内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。内底に渦状にロクロ目、砂目が残る。竹節高台の内側を丸くくぼむように削り出し、中心部は円錐状に突出する。灰白色 (2.5Y8/2) の胎土に淡黄色 (2.5Y8/3) の釉が掛かり、内面は貫入、外底にはかいらぎ状のちぢれがみられる。

SK42 出土遺物 (第 20 図)

備前焼 片口鉢 (11) 口縁部下に柱状の注口を貼り付ける平底の鉢で、注口は基部のみの残存である。注口の中心から両脇に 3cm の位置に口縁部から 2.5cm の縦方向の線刻を施す。短く直立する口縁部と内湾する体部の境は明瞭で、体部外面中位から内底まで回転横ナデ、内底には渦状にロクロ目が残る。下半以下底部までは不定方向のヘラ削りを施す。無軸焼き締めて、にぶい赤褐色を呈する。

SX08 出土遺物 (第 20 図)

土師器 杯 (1) 底部は回転糸切り、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 10.5cm・器高 2.0cm。

肥前陶器 小碗 (2) 体部が内湾し、口縁部は直立気味に外に開く。口縁部下外面を強くナデる。高台は低く、体部との境は不明瞭で、内側の削りは浅い。胎土はオリーブ灰色 (5GY6/1) を呈し、灰色 (7.5Y6/1) の釉が体部下半まで掛けられる。

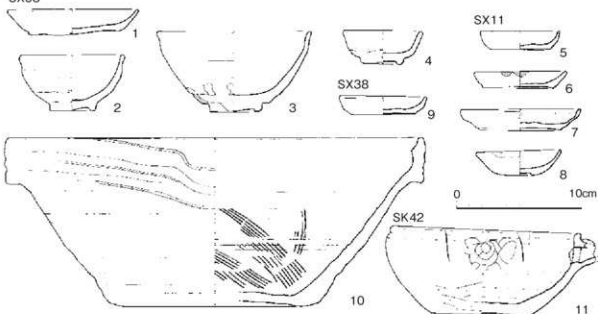
瀬戸美濃系陶器 天目碗 (3) 鉄軸の天目碗で、体部がやや丸みを持って外上方に延び、上位で屈曲し口縁部が直立気味に開き、端部をわずかにつまみ出す。底端部よりやや内側に断面四角の高台を削り出す。高台内の削り出しは浅く、外側を面取りする。胎土には黒色微粒子を多量に含み、灰白色 (2.5Y8/1) を含む。にぶい赤褐色 (5Y4/4) の釉を体部下半まで掛け、口縁端部は暗赤褐色 (5YR3/3)、内底は黒褐色 (5YR2/2) を呈する。

小碗 (4) 丸碗形の灰釉小碗で、底部と体部の境が不明瞭で、体部がほぼ直線的に口縁部まで延び、口縁下でわずかに外反する。底端部よりやや内側に削り出す高台は断面台形を呈し、外側を面取りする。黒色微粒子を含む明オリーブ灰色 (5GY7/1) の胎土に、浅黄色 (5Y7/4) 釉を下半まで掛ける。

SX11 出土遺物 (第 20 図)

土師器 底部は静止糸切り離しによる。小皿 (5-6) 体部が回転横ナデ、内底はナデ、口径 6.3・7.4cm・器高 1.4・1.3cm を測り、6 は口縁端部に煤が付着し、外底に板状圧痕が残る。

SX08



第 20 図 石横土坑 SX08・11・38 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

杯 (7) 体部中位が薄く、口縁部下内面に段が付く。体部外面から内底まで回転横ナデ、口径9.7cm・器高1.7cmを測る。内底に付着物がある。

白磁 小皿 (8) 口径6.9cm・器高2.0cmを測る碁笥底の小皿である。

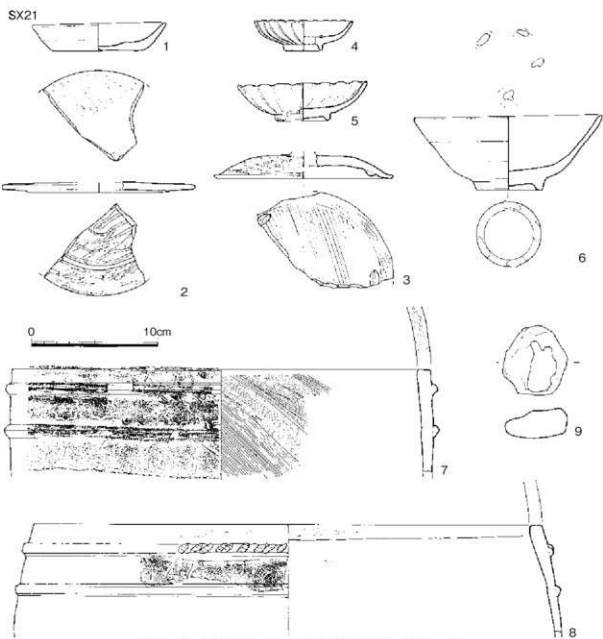
SX38 出土遺物 (第20図)

土師器 小皿 (9) 底部は静止糸切り離しによる。体部外面が回転横ナデ、内底はナデ、口径7.0cm・器高1.5cmを測り、外底に煤が付着している。

備前焼 すり鉢 (10) 口縁帯は薄板作りで、口縁端部内面は鈎状に窪み、外面に凹線を2条めぐらせる。内面に斜め方向のすり目を入れるが、使用による磨滅が著しく、すり目を新たに付けている。

SX21 出土遺物 (第21図)

土師器 杯 (1) 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径10.5cm・器高2.1cmを測る。



第21図 石積土坑 SX21 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

瓦質土器 蓋 (2・3) 2は天井部と口縁部の境が不明瞭で、口縁部は外反する。内面の天井部と口縁部の境付近に粘土貼り付けによる突起 (2ヵ所残存するが、3ヵ所に復元できる) を有する。外面天井部から口縁端部上位まで不定方向、口縁端部から内面口縁部にかけて横方向のヘラ磨き、内面天井部は粗いハケ目を施す。3は平坦な円盤状を呈し、上面は周縁がヘラ削り、それ以外は粗いハケ目、端部は横ナデ、下面はヘラ磨きし、周縁部との境に細い断面台形の突帯をめぐらせる。

白磁 菊皿 (4・5) 体部内面は型による凹凸、外面は線彫り、口縁周縁は削り出しにより花卉を表す。

白磁 (朝鮮) 碗 (6) 丸みを持つ体部から外上方へ直線的に延びる。高台は断面台形で、畳付と内底に目跡が残る。胎土は灰白色 (2.5GY) を呈し、明オリブ灰色 (5GY7/1) の軸を全面に掛ける。

瓦質土器 鉢 (7・8) 7は体部から口縁部にかけてほぼ直立する。口縁部上面と内面はハケ目、外面はナデ調整を施し、口縁部外面に2条の突帯をめぐらせ、その間に印花により八弁の花文をめぐらす。8は体部から口縁部にかけて僅かに内傾し立ち上がる。内面は口縁端部がハケ目、その下位はヘラナデを施す。外面はナデ調整を施し、口縁部外面に2条の突帯をめぐらせ、上位の突帯には刻み目を入れる。2条の突帯の間には反り一つ目文を入れる。

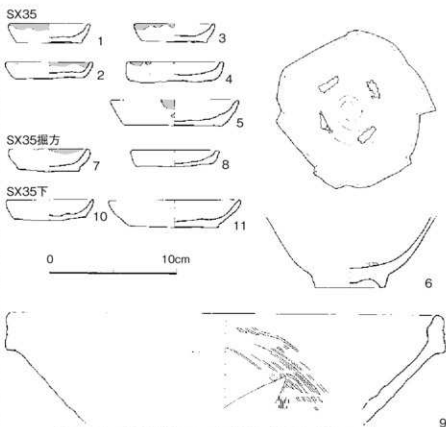
瓦玉 (9) 平瓦片を打ち欠き木板にした土製品で、転用前に付いた瓦の縄目や布目が残る。

SX35 出土遺物 (第22図) 金属製品は第37図参照。

土師器 いずれも口縁端部に煤が付着する。小皿 (1~4) 1・2は底部が静止糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.5cm・器高1.4~1.5cmを測る。体部と底部の境の屈曲部が肥厚している。3・4は回転糸切り離し、体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径6.9~7.7cm・器高1.3~1.6cmを測る。4は口縁部が直立し、厚手に作られる。

杯 (5) 底部は静止糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径10.2cm・器高2.0cmを測る。体部と底部の境の屈曲部が肥厚している。

白磁 (朝鮮) 碗 (6) 丸みを持つ体部から外上方へ直線的に延びる。口縁部は欠失している。内底見込みには渦状のロクロ目が残り、体部との境は明瞭でない。体部外面下位以下は回転ヘラ削り、体部外面中位から内面にかけては回転横ナデを施す。断面台形の竹節高台を削り出す。胎土は灰白色 (10Y8/1) を呈する。灰白色 (10Y7/1) の軸を全面に掛け、畳付の軸をかき取り露胎とする。内底に目跡が付着し、畳付の目跡は焼成後削り取る。



第22図 埋納遺構 SX35 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SX35 掘方出土遺物 (第22図)

土師器 小皿 (7-8) 8は底部が回転糸切り離し、体部が回転横ナデ、内底はナデ、口径6.5cm・器高1.8cmを測る。口縁部下が肥厚し、端部には煤が付着する。8は静止糸切り離し、体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径7.0cm・器高1.3cmを測る。体部下位で屈曲・肥厚し、口縁部が短く直立する。

備前焼 すり鉢 (9) 口縁部が厚く、立ち上がりは低い。体部内面には斜め方向のすり目を入れる。口縁部外面に2条の凹線を入れる。

SX35 下石積土坑出土遺物 (第22図)

土師器 小皿 (10) 底部は静止糸切り離し、体部外面から内底まで回転横ナデ、口径6.9cm・器高1.6cm
杯 (11) 静止糸切り離し、体部が回転横ナデ、内底はナデ、口径10.5cm・器高2.5cmを測る。

A-1層出土遺物 (第23-25図) 調査区短辺をA・B、長辺を1・2とし、グリッド毎に取り上げた。

土師器 底部は回転糸切り離しによる。小皿 (1~10) 1・4・6~8は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径6.7~7.4cm 器高1.3~1.6cmを測る。2・3・5・9・10は体部外面から内底まで回転横ナデ、2・3・5は口径6.7~7.0cm・器高1.3~1.6cmを測る。9は口径7.4cm・器高2.0cm・底径2.8cmを測り、他と比べ器高が高く、底径が小さい。内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。粗い砂粒を含む精良な胎土である。10は口径7.0cm・器高1.6cm・底径3.0cmと、他と比べ底径が小さい。外反する体部から口縁部が直に延びる。内面にはロクロ目が鋭く残る。粗い砂粒を含む精良な胎土である。

杯 (11-12) 体部が回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径10.0cm・器高2.4cmを測る。

瀬戸美濃系陶器 皿 (13) 灰軸端反り皿で、灰白色の胎土に浅黄色の透明釉を高台内側まで掛ける。

青磁 碗 (14) 蓮弁文線描き碗底部片で、見込みに印文を施し、全面施釉後外底の釉を輪割りする。

白磁 (朝鮮) 碗 (15) 丸みを持つ体部から口縁部が直線的に延びる。内底見込みに渦状のロクロ目が残り、体部との境は明瞭でない。断面台形の竹節高台は内側の削り出しが浅く、底部が厚い。胎土は灰白色 (2.5Y8/2) を呈し、淡黄色 (2.5Y8/3) の釉が全面に掛けられる。内底と高台畳付に目跡あり。

白磁 皿 (16) 端反りの高台付皿で、底部が高台内にくぼむ。高台畳付は露胎で、砂が溶着している。口径11.3cm・器高2.9cmを測る。

小杯 (17~19) 17は内湾する体部から外反する口縁部が延びる深め的小杯で高台畳付付近は露胎である。18-19は体部下位で屈曲し、口縁部が直線的に延びる。内底見込みは平坦で、全面施釉の後輪割りする。高台畳付の釉もカキ取り露胎とする。

青花 碗 III (20) 口縁端部が欠失しているが、内湾する体部から端反り口縁が延びるとみられる。内底見込みに麒麟を描き、外底に年款「宣徳年造」を記す。

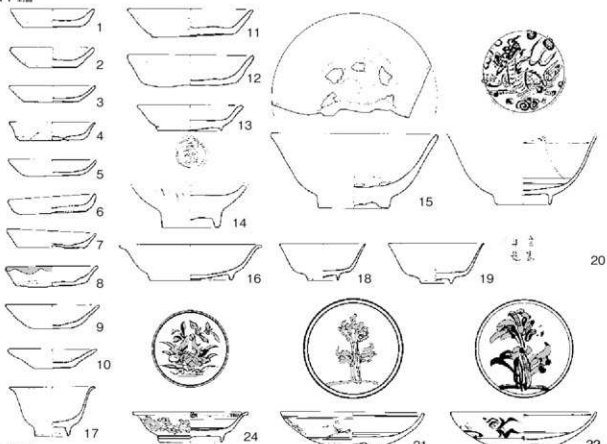
皿 (21-22) 21・22は内底に蔬菜文を描く萁笥底の皿で、畳付付近が露胎となっている。21が精製のIa、22は粗製のIbである。23は端反りの高台付皿IIaで、高台畳付は露胎である。体部外面に宝相華唐草文、内底見込みに団花文を描く。口径9.2cm・器高2.2cmを測る小型品である。

五彩 皿 (24) 小型の端反り高台付皿の体部外面に宝相華唐草文、口縁部内面に襷文帯、内底見込みは蓮池文を描く。軸下は青花で文様の外郭線を描き、葉の軸上は黄緑色に塗りつぶす。

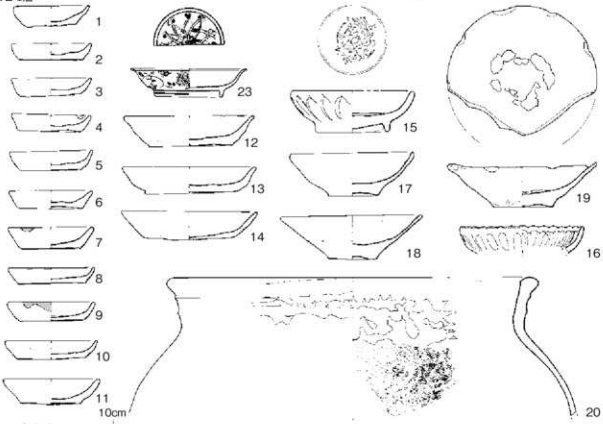
瓦質土器 鉢 (25~27) 25は体部下位の破片資料で、体部は内湾気味に直立し、外面の底部付近に2条の突帯、その上位に印刻により三重襷文帯をめぐらす。26は斜めに立ち上がる口縁部片で、内面はハケ目、外面はナデ調整を施し、印花により渦巻文をめぐらす。27は平面形が隅丸半円形を呈し、体部は直に立ち上がり、直線部分が方形に削り込まれ弧の部分より低くなっている。線香立てか。

木滴 (28) 直径3.3cm・高さ3.3mmの筒形を呈し、天井部外周に径8mmの穿孔、外面はヘラ磨き。

A-1 I層



A-2 I層



0 10cm

第 23 圖 A-1・2 I 層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

A-2 I 層出土遺物 (第 23 図)

土師器 小皿 (1~11) 底部の切り離しは 1~8・11 が回転糸、9・10 は静止糸による。1・3・8 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 6.1~6.9cm・器高 1.3~1.6cm を測る。2・4・5~7・9・10 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 6.4~7.4cm・器高 1.3~1.7cm を測る。4・7・9 は口縁端部に煤が付着している。11 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.7cm・器高 2.1cm・底径 4.8cm を測り、他と比べ口径が大きく、器高が高い。外面の半分に煤が付着している。杯 (12~14) 底部は回転糸切り離しによる。体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 10.4~10.7cm・器高 2.0~2.4cm を測る。

青磁 皿 (15・16) 断面方形の高台付丸皿で、15 は体部外面に蓮弁をへら彫りし、見込みに印花文を施す。16 は口縁部を花卉状に細かく切り出し、体部内外面に丸彫りによる蓮弁文を施す。

雑釉陶器 (朝鮮) 皿 (17~19) 平底の皿で、内側の削り出しが浅く上げ底状を呈し、底部が厚い。18 は底部から口縁部まで内湾気味に、18 は直線的に延びる。17 の胎土には白・黒色微粒子を含み、灰色 (N5/) を呈し、灰色 (7.5Y5/2) の釉を全面に掛ける。18 の胎土には粗い白色粒子・黒色微粒子を多量に含み、にぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。灰オリーブ色 (10Y5/2) の釉を全面に掛ける。19 は体部が直線的に、中位で屈曲し外反する口縁部が延びる。口縁端部に抉りを入れ輪花にする。胎土には粗い白色粒子・黒色微粒子を多量に含み、灰色 (N5/) を呈する。灰色 (7.5Y4/1) の釉を全面に掛け、見込みに目跡が残る。

甕 (20) 口縁部が直立気味に短く開き、端部は肥厚する。口縁下外面に断面三角形の突帯が 2 条めぐらる。口縁部内面から体部外面まで横ナデ、体部内面には同心円の当て具痕が残る。灰色 (10Y6/1) の胎土に、暗オリーブ色 (5Y4/3・4/4) の釉を掛ける。

A-2 II 層出土遺物 (第 24 図)

土師器 小皿 (1・2) 底部の切り離しは回転糸切り離しによる。1 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.1cm・器高 1.6cm を測る。2 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 7.4cm・器高 1.5cm を測る。口縁端部に煤が付着している。

B-1 I 層出土遺物 (第 24・25 図)

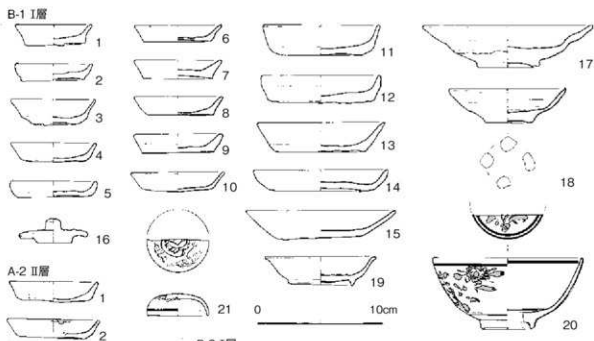
土師器 小皿 (1~10) 底部の切り離しは 1~4・6~8・10 が回転糸切り離し、5・9 は静止糸切り離しによる。2・6~10 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 6.2~7.5cm・器高 1.4~1.6cm を測る。1・3~5 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 6.1~7.0cm・器高 1.3~2.1cm を測る。1 は厚底の底部から口縁部が短く外反する。7~9 は体部と底部の境の屈曲部が肥厚している。

杯 (11~15) 11~13・15 の底部は回転糸切り離し、14 は静止糸切り離しによる。11・14・15 は体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 9.4・10.8・12.0cm・器高 2.4・1.8・2.3cm を測る。12・13 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.6・10.3cm・器高 2.3・2.4cm を測る。

蓋 (16) 掘みを持つ栓状蓋で、外面の天井部と体部との境は明瞭である。底面は回転糸切り離し、その他の部位は掘みから身受け側面まで回転横ナデ、口径 5.5cm・器高 2.1cm・身受け径 2.7cm を測る。肥前陶器 皿 (17) 内湾気味の体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に延びる。内底見込みに胎土目が残る。高台付の目跡と付着していた部分は打ち欠かされている。

雑釉陶器 (朝鮮) 皿 (18) 高台は体部との境が不明瞭ながら高さ 6mm で、内側の削り出しが浅く底部が厚い。体部下位で屈曲し口縁部が直線的に延びる。高台付付近に目跡が 4ヶ所残る。

白磁 皿 (19) 端反りの高台付皿で、全面施釉の後内底見込みの釉を輪剥ぎする。高台付の釉もカキ取り露胎とする。口径 8.9cm・器高 2.2cm の小型品である。

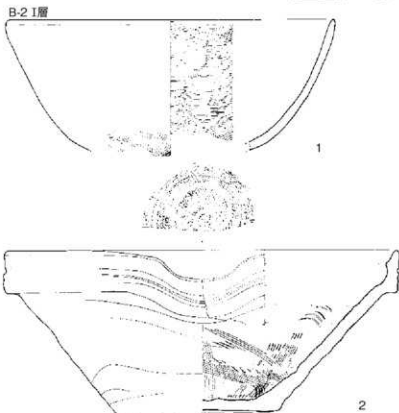


青花 碗 IIa (20) 丸みを持つ体部から口縁部が直線的に延びる。体部外面と内底見込みに菊花文を描く。全面施釉の後、高台端部の釉をかき取り、丸く収めている。

合子蓋 (21) 天井部と体部の境はなく、全面施釉の後口縁端部の釉をかき取り露胎としている。外面天井部に蓮華唐草文、口縁部上位に圈線を描く。

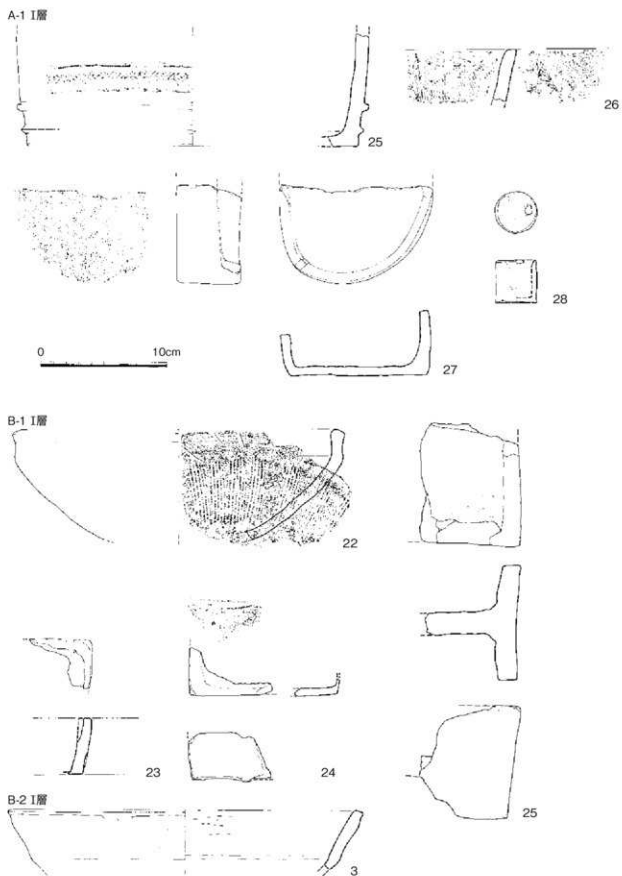
瓦質土器 すり鉢 (22) 内湾する体部が上位で屈曲し、口縁部が直に立ち上がる。

鉢 (23～25) 四隅に鉤形の脚が付く方形の鉢の破片で、23は口縁部まで残存するが、貼付された脚が剥離している。脚部を除いた高さは4.4cmを測る。内面がハケ目、外面の口縁部付近は横ナデ調整である。24は口縁部と脚部が欠失している。25は隅に鉤形の脚が付き、脚下端から底部にかけて2段の削り込みを入れる。

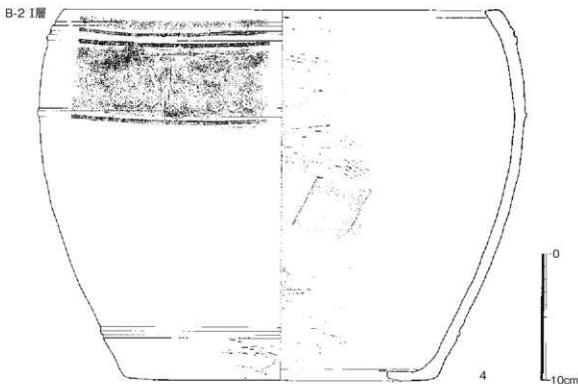


第24図 B-1・2 I層出土遺物実測図 (縮尺1/3)

B-2 I層出土物 (第24～26図) 土器器 鍋 (1・3) 1は内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。底部は欠失している。内面は横方向のハケ目、外面は口縁部から体部上半までナデ、底部付近は不定方向のハケ目を施す。3は体部中位以下が欠失し、体部上位で屈曲し口縁部が直に延びる。内面がハケ目、



第 25 图 A-1·B-1·2 I 層出土瓦質土器実測図 (縮尺 1/3)



第26図 B-2 I層出土瓦質土器実測図(縮尺1/3)

外面には指頭圧痕が残り、煤が付着している。

備前焼 すり鉢 (2) 口縁帯は薄板作りで、口縁端部内面は鈎状に窪み、外面に2条の凹線がめぐり、体部内面に斜め方向のすり目、見込みにもすり目を入れる。

瓦質土器 鉢 (4) 体部上位に最大径を取り、内湾する口縁部が延びる。内面はハケ目、外面はナデ調整を施し、口縁部外面に2条、体部上位と底部付近に1条の突帯、上位には印花で葉文をめぐらす。

瓦類 (第27～31図)

SE31 出土瓦 軒丸瓦 (25) 内区は三巴文と珠文帯、外区素文縁の高さは0.5cmと低い。軒平瓦 (26) 瓦当中心部の破片で、中心飾の宝珠から延びる唐草の根本が残る。

埴 (27) 凸面は縄目痕をナデ消し、凹面は布目痕が残り、分割面と内側両側面を面取りしている。

板瓦 (28) 平らな方形の隅の部分で、角から斜め45°9cmの位置に直径1.0cmの釘穴を穿つ。

袖瓦 (29) 切妻屋根の側面端部けらばに用いられた袖瓦で、垂れの部分が完存している。

平瓦 (30-31) 井側用にいられた平瓦で、表面はほぼ成形され、側面の断面形はほぼ直角である。全長31cm・幅26cm・厚さ3cmを測り、円筒形に組み上げるために両端の幅は等しい。同規格の瓦を10枚組み合わせ、1段当たり高さ31cm・直径76cmの井側となす。

SK01 出土瓦 埴 (9) 厚さ4.0cmの素文の埴の角の破片である。

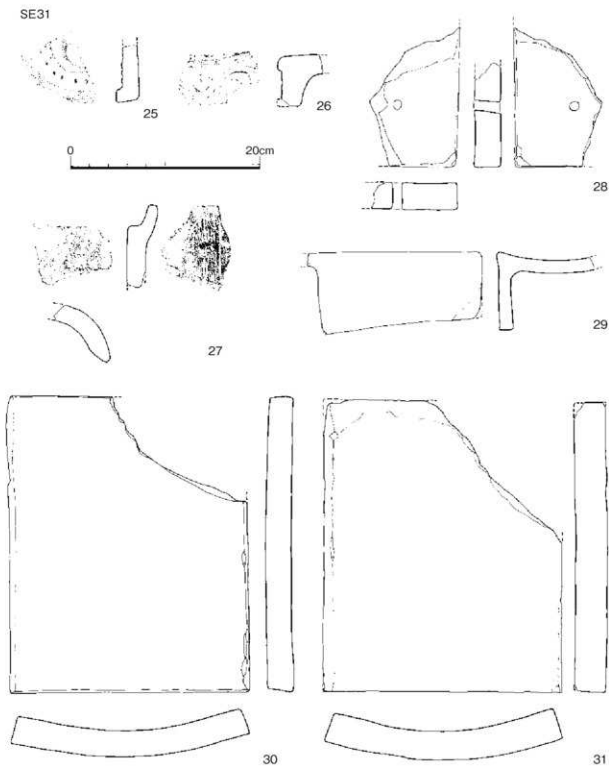
SK02 出土瓦 軒丸瓦 (1) 三巴文の周囲にめぐらされた珠文26前後とみられ、外区素文縁の高さは1.0cmを測る。

埴 (2～4) いずれも隅の部分で、厚手の2は角から斜め45°11cmの位置に直径10～12cm、薄手の3・4は7cmの位置に直径0.8cmの釘穴を穿つ。建物の外周基礎に貼り付けられたものであろうか。

SK04 出土瓦 軒平瓦 (5) 宝珠の中心飾りから、左右に4回反転する均整唐草文がのびる。

平瓦 (6・7) 凹面には鉄線切り(コビキB)痕が残る。

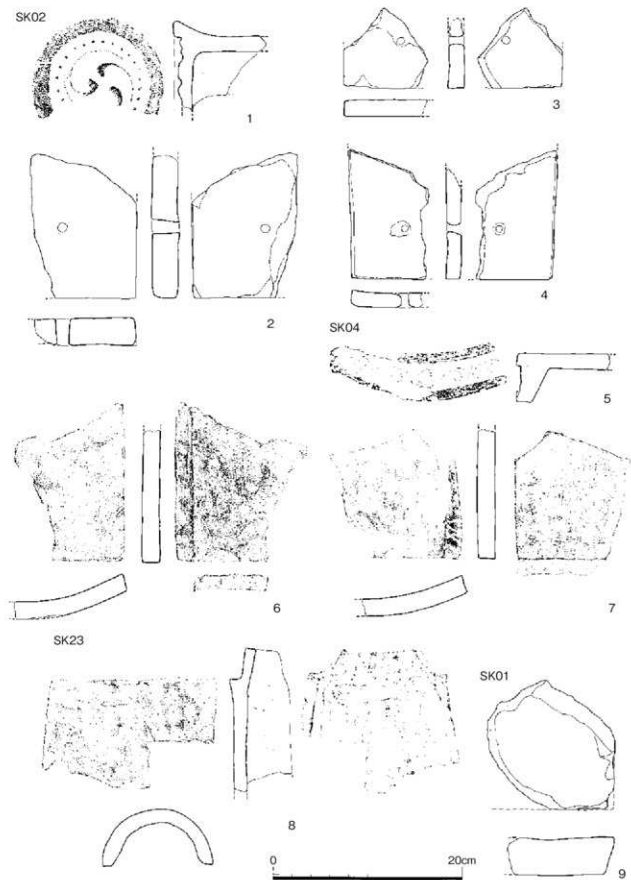
SK23 出土瓦 丸瓦 (8) 凸面は完全に整形、凹面は布目・抜取り縄痕が残り、内側面を面取りする。



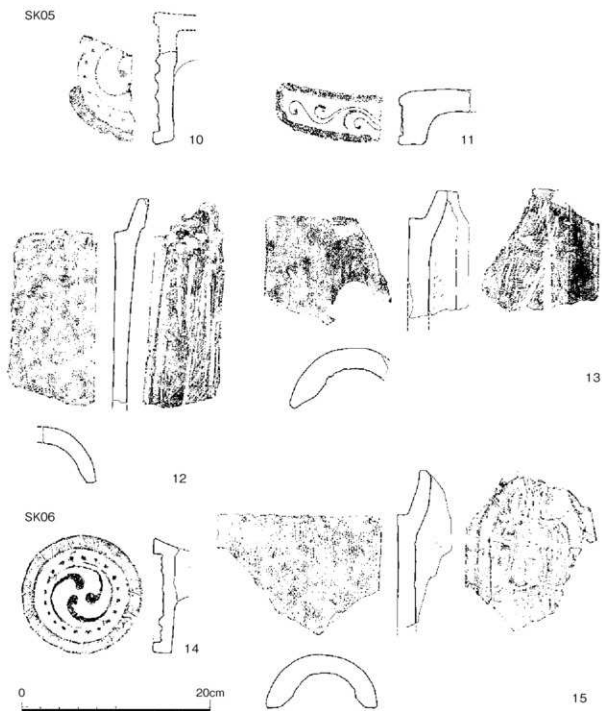
第27図 瓦類実測図1 (縮尺1/4)

SK05 出土瓦 軒丸瓦 (10) 1/4 残存の瓦当面で、巴文の周囲にめぐらされた珠文は20前後とみられる。軒平瓦 (11) 瓦当の左半分の破片で、中心から3回反転する唐草が延びる。丸瓦 (12・13) 凸面は縄目痕をナデ消し、凹面は布目痕が残り、分割面と内側両側面を面取りしている。

SK06 出土瓦 軒丸瓦 (14) 瓦当完存、尾長の三巴文の周囲に珠文20を配し、外区素文縁高は1.0cm。



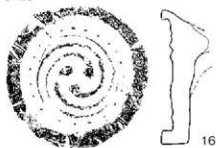
第28図 瓦類実測図2 (縮尺 1/4)



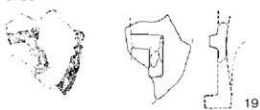
第29図 瓦類実測図3 (縮尺1/4)

丸瓦 (15) 凸面は縄目痕、凹面には布目痕が明瞭に残り、太い糸で横に縫われた痕跡がみられる。
 SK25 出土瓦 軒丸瓦 (16) 瓦当完存、三巴文は半周の尾を引き、周囲の珠文21、素文縁高は1.0cm。
 SD29 出土瓦 軒丸瓦 (17・18) いずれも小型で、17は内区三巴文と珠文帯との間に界線を配し、
 珠文の数は34、外区素文縁の高さは1.0cmを測る。18は内区の中央上・左下・右下に「飾・田・宮」
 の文字を入れる。珠文帯との間に界線を配し、珠文の数は22前後、珠文帯と外区素文縁の間にも界
 線を配する。外区素文縁の高さは1.0cmを測る。

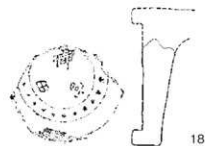
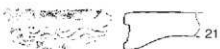
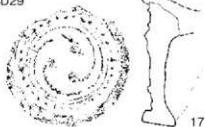
SK25



SK36



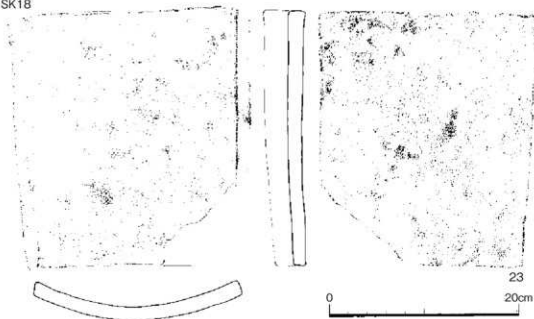
SD29



SK37



SK18



第 30 図 瓦類実測図 4 (縮尺 1/4)

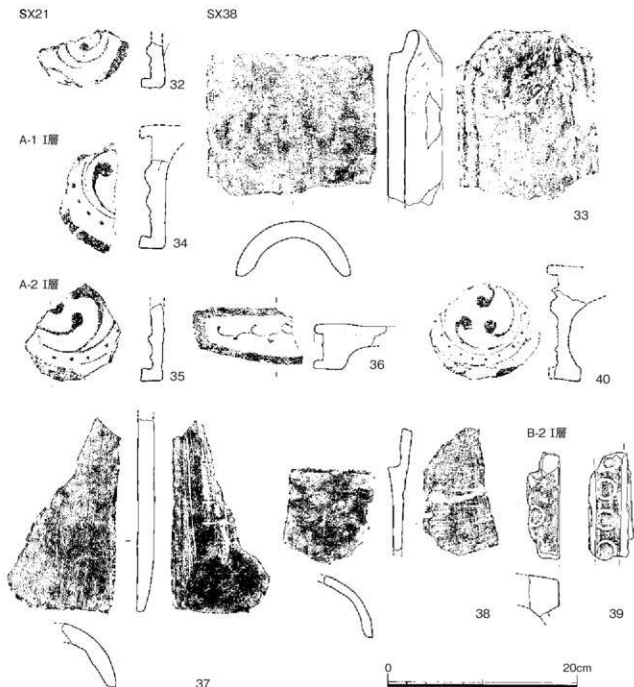
SK36 出土瓦 軒丸瓦 (19-20) 19 は内区に卍を配した 1/4 の瓦当片、20 は内区三巴文と珠文帯との間に界線を配する。

軒平瓦 (21) 内区に水波文を配し、左半部が残存する。

SD37 出土瓦 軒平瓦 (22) 内区に左右に 3 回反転する均整唐草文を配し、左半部が残存する。

SK18 出土瓦 平瓦 (23) 凹面に鉄線切り離し痕 (コビキ B) が残る。

SX21 出土瓦 軒丸瓦 (32) 小型品で棟込瓦に用いられたとみられる。



第 31 図 瓦類実測図 5 (縮尺 1/4)

SX38 出土瓦 丸瓦 (33) 凹面は布目・抜取り縄痕が残り、内側側面を面取りしている。

A-1 I層出土瓦 軒丸瓦 (34) 内区三巴文と珠文帯間に界線を配し、外区素文縁高1.0cmを測る。

A-2 I層出土瓦 軒丸瓦 (35) 内区三巴文と珠文帯との間に界線を配し、外区素文縁の高さは1.0cmを測る。軒平瓦 (36) 瓦当左側の破片で、反転する唐草文がのびる。丸瓦 (37・38) 凸面は縄目痕をナデ消し、凹面は布目痕が残り、内側両側面を面取りしている。37は端面を面取りしている。

B-2 I層出土瓦 鬼瓦 (39) 顔面脇の竹文帯とみられる。

攪乱出土瓦 軒丸瓦 (40) 内区三巴文と珠文帯との間に界線を配し、外区素文縁が欠失、高さ不明。

ガラス製品 (第32図) (1~11) 1~10は径5mm前後のガラス小玉で、1・2はSK14出土、水色、3はSK16出土、緑色、4はSK17出土、水色、5はSD30出土、水色、6はSD37出土、水色、7はA-1 I層出土、緑色透明、8~10はB-1 I層出土、8は緑色透明、9・10は水色を呈する。11は径1cm前後のガラス小玉で、A-1 I層出土、緑色を呈する。

土製品 (第32図)

土錘 管状土錘 (1~21) 最大径1.0cm前後の1~19、1.8cm前後の20・21に大別される。1 - SK06. 2・3 - SK12. 3 - SE06. 4 - SK13. 5 - SK14. 6 - SE17. 7 - SK24. 8 - SD29.9 - 11 - SD30. 12 - SK39.13 - A-1 I層. 14 - 17 - A-2 I層. 18 - B-1 I層. 19 - B-2 I層出土である。紡錘形土錘 (22~24) 最大径2.0cm前後の22・23、3.0cmの24に分けられる。22 - SX21. 23 - K-07. 24 - A-2 I層. 25 - SK12 出土である。

瓦玉 (1~9) 平瓦や瓦質土器の破片を再加工した円板状の土製品で、転用前に付いた瓦の布目、土器のハケ目、煤が残る。1 - SK01.2~4 - SD30.5・9 - SD37.6~8 - A-1 I層からの出土である。

土玉 (10) 径15mmの球形の土製品で、SD37から出土した。

土馬 (11) 馬に跨る人物の胴体が残存し、馬の脚部は欠失している。SK01出土。

土製仏 (12) 形状不明の台座に坐した尊像で、やや扁平な造形で、像底部は平坦に仕上げる。頭部と右肩が欠失し、残存高4.9cm・幅4.0cm・最大厚1.7cmを測る。SK04出土。

土製人形 (13) 肘を曲げて拳を握る人形の右腕で、欠失部位はない。衣裳着人形にはめ込む頭部や四肢の部品の一つで、拳には持物を挿入するための径3mmの孔が穿たれている。B-1 I層出土。

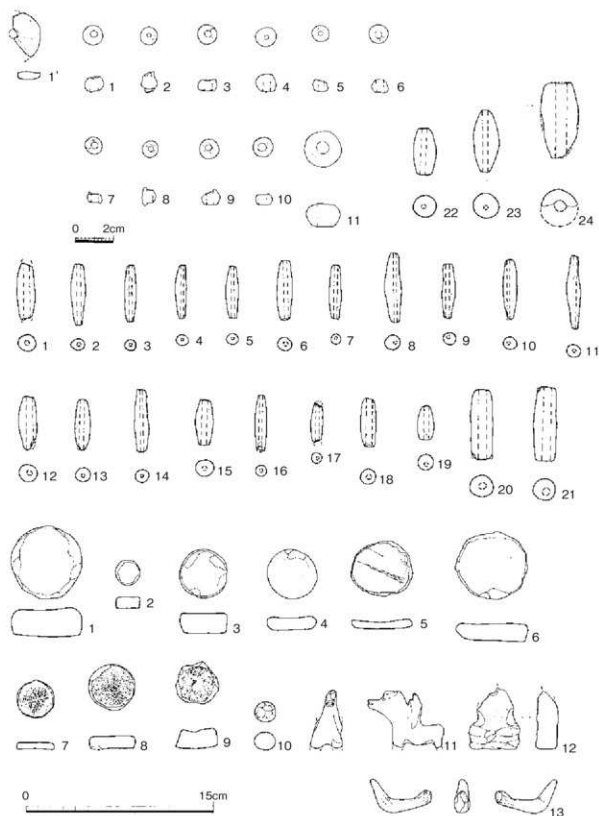
石製品 (第32・33図)

石製有孔円板 (1) 1/3が残存、復元径4.0cm・厚さ6mmを測る。中心に孔を穿つ。SK17出土。

滑石製石鍋 (1) 体部が直線的に斜め45°に開き、外面の口縁部下に断面三角形の鐮をめぐらす。SK12出土。

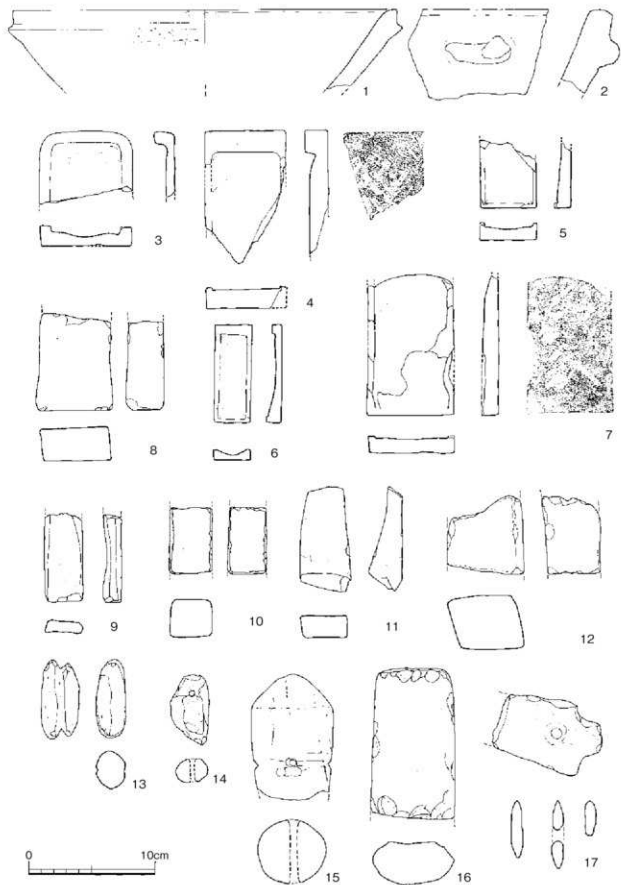
石鉢 (白) (2) 外面の口縁部下に把手を刻み出す。SK10出土。

硯 (3~7) 3は残存長5.7cm・短辺7.2cm・高さ1.6cm・厚さ1.1cmを測る隅丸方形硯で、海側を中心に残存する。石材は玄武岩質で、紫灰色を呈する。SK12出土。4は残存長10.4cm・短辺6.3cm・高さ1.8cm・厚さ1.5cmを測る方形硯で、海側を中心に残存する。表面と側面は平滑に研磨されているが、裏面は成形時のノミ痕が残る。石材は玄武岩質で、赤灰色を呈する。A-1 I層出土。5は残存長5.4cm・短辺4.5cm・高さ1.3cm・厚さ1.0cmを測る方形硯で、海側が欠失している。石材は玄武岩質で、赤灰色を呈する。K-09出土。6は長辺7.7cm・短辺3.3cm・高さ0.9cm・厚さ0.7cmを測る方形硯で、石材は玄武岩質で、淡灰褐色を呈する。A-2 I層出土。7は残存長11.1cm・短辺6.8cm・高さ1.3cm・厚さ1.1cmを測る方形硯で、海側縁部が欠失している。表面と側面は平滑に研磨されているが、裏面は成形時のノミ痕が残る。石材は玄武岩質で、赤灰色を呈する。K-05出土。



第32図 ガラス・土製品実測図 (縮尺 1/1・1/3)

砥石(8~12)8は残存長7.5cm・幅6.5cm・厚さ2.5cmの頁岩製で、4面とも砥面とする。SK26出土。
 9は残存長7.0cm・幅3.0cm・残存厚8mmの頁岩製で、上面を砥面とする。SD30出土。10は残存長5.3cm・
 幅・厚さとも3.0cmの砂岩製で、4面とも砥面とする。SD37出土。11は残存長8.3cm・幅4.0cm・厚さ



第33図 石製品実測図 (縮尺 1/3)

1.2～2.2cmを測り、玄武岩質の石材を用いる。4面とも砥面とする。A-1 I層出土。12は残存長7.2cm・幅6.0cm・厚さ4.0cmの砂岩製で、4面を砥面とする。SK04出土。

石錘(13～15) 13は滑石製有溝石錘で、長軸の両端を切り欠き、その間に溝を入れる。全長6.3cm・幅2.9cm・厚さ1.9cmを測る。SK13出土。14は不整半月形を呈し、全長6.5cm・幅3.0cm・厚さ2.0cmを測る。上部の先端から1.5cmの位置に径3mmの孔を穿つ。A-1 I層出土。15は一端が欠失し、砲弾形を呈する。残存長9.8cm・最大径6.4cmを測り、先端から7cmの外周に幅3.0mm・深さ3～5mmのV字溝をめぐらせ、径8mmの穿孔を施す。蛇紋岩製。A-2 I層出土。

石斧(16) 蛤刃石斧で刃部は欠失している。玄武岩製で青灰色を呈する。SK18出土。

石戈(17)基部が残存し、刃部と茎の半分、2つの孔の内1が欠失している。玄武岩製で暗青灰色を呈する。SK42出土。

石臼(第34・35図)(1～4) 1・2は砂岩製の下臼で、SX21石積土坑から出土し、1は3片、2は2片に割れ、石積の石材に転用されていた。1は白面、受皿端部が欠失している。残存する受皿は丁寧に研磨され、残存径は最大で37.5cm、脚部は高さ4.3cm・復元径32.2cmを測り、内面には工具痕が残る。芯棒孔は隅丸方形を呈し、1辺2.2cmを測る。2の白面は8分割で溝は1区画あたり9本切る。受皿の内面は丁寧に研磨されるが、外面は工具痕が残る。復元径36.8cm、脚部は高さ4.8cm・復元径32.2cmを測り、内外面とも工具痕が残る。芯棒孔は隅丸方形を呈し、1辺2.0cmを測る。

3は花崗岩製の下臼で、約1/6の残存で、高さ8.0cmを測る。B-2 I層出土。4は花崗岩製の上臼で、上面の周囲に幅2.2cm・高さ1.2cmの縁をめぐらせ、側面には挽き手を打ち込む隅丸方形の孔が2方向から向かい合わせて穿たれ、孔の周囲には正方形を45°回転した◇の浮き彫りを施す。下面は8分割で溝は1区画あたり8～10本のすり目を切る。約半分弱が残存し、復元径21.0cm・高さ13.3cm・中心軸径2.8cmを測る。B-1 I層出土。

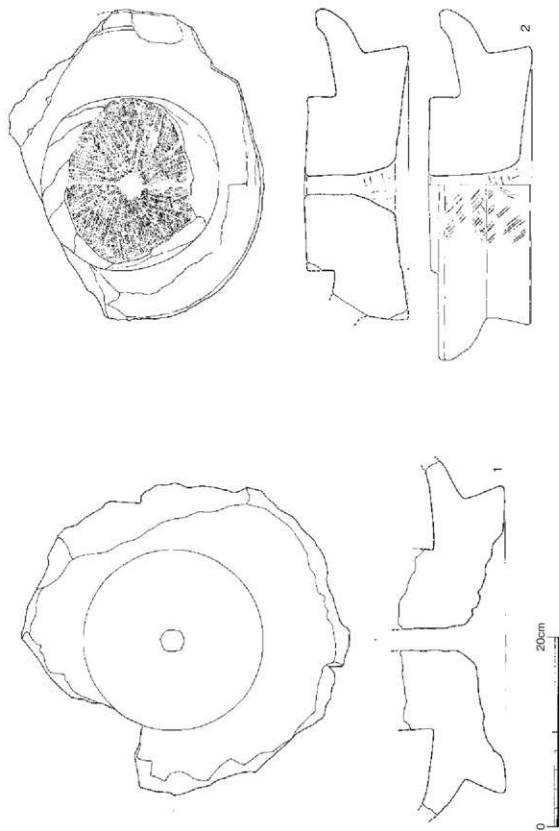
板碑(第35図)(5～7) 頭部は三角形で、その下に2条の切り込みを入れる。裏面は未調整で工具痕が残る。いずれも砂岩製である。5は頭部右側と身部下半部以下が欠失し、身部に種字「カ」(地藏菩薩)を薬研彫りする。幅13.2cm・残存高16.8cm・厚さ7.6cm、額部は幅4.0cm・高さ0.5cmを測る。SX21石積土坑出土で、石積の石材に転用されていた。6は額部までの残存で、幅19.0cm・残存高14.5cm・厚さ7.5cmを測る。A-1 I層出土。7は身部下半部以下が欠失し、身部に種字「サ」(観世音菩薩)を薬研彫りする。幅21.2cm・残存高24.8cm・厚さ10.5cm、額部は幅3.2cm・高さ1.0cmを測る。B-1 I層出土。

鑄造・製鉄関係遺物(第36図)

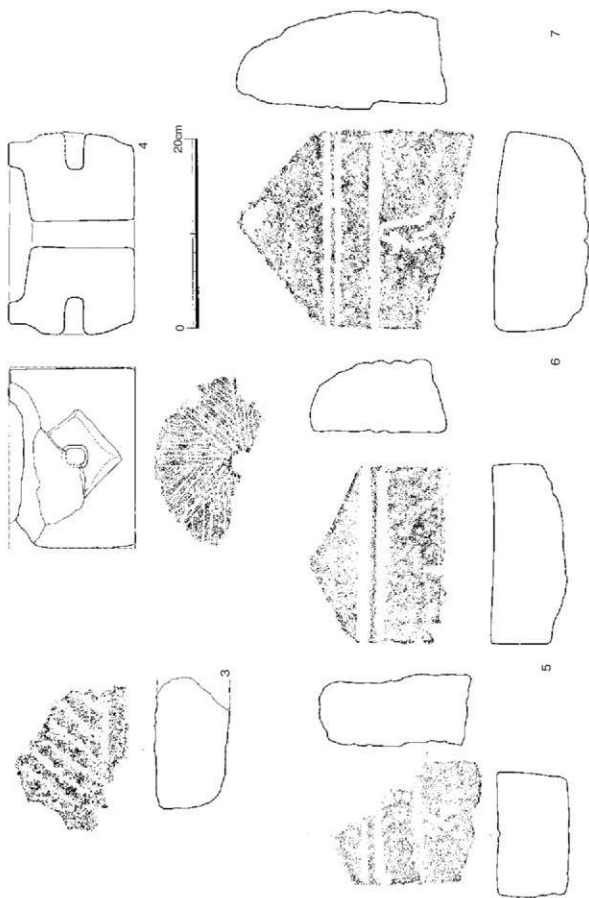
トリベ(1～6) 小型の1～4と中型の5・6に大別される。外面全体に指押さえやナデの痕跡、内面には金属を溶解した際の痕跡が残る。1・A-1 I層、2・SK01、3・5・6・SX35、4・K-09出土である。

輪羽口(7～11) 外径8.5～10.0cmの円筒形を呈し、径2.0～2.5cmの孔を外形と平行に通す。8～9は高熱により一部ガラス化した先端が残る。7・SK06、8・A-2 I層、9・SX21、10・B-2 I層、11・K-05出土である。

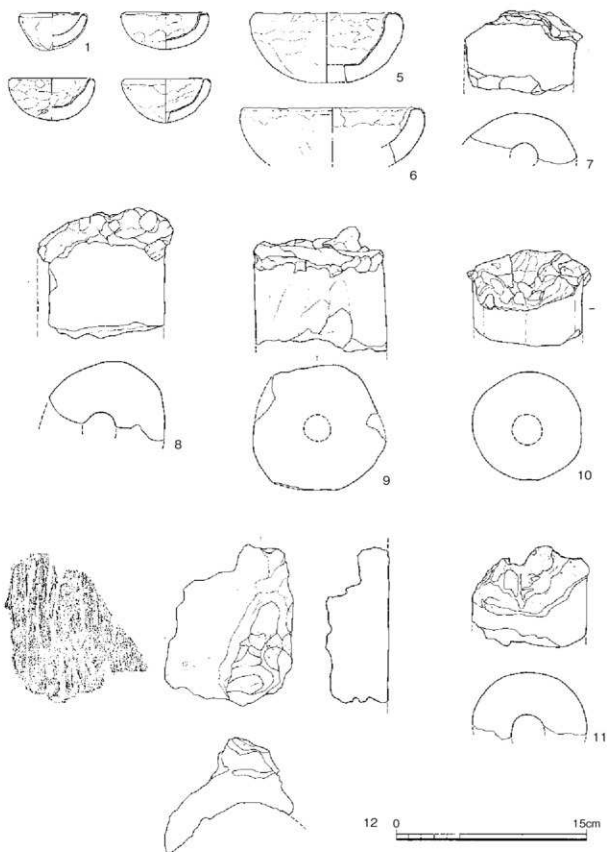
炉壁(12) 平面形が隅丸方形を呈する炉体隅の破片で、土師質に焼成される。外面にはガラス質化した部位がみられ、内面には粘土板を折り曲げた際に生じた皺が残る。IV区I層出土。



第34図 石臼1実測図(縮尺1/4)



第35図 石臼2・板碑実測図（縮尺1/4）



第36图 铸造関係遺物実測图 (縮尺 1/3)

金属製品 (第 37 図)

懸仏 (1・2) 1 は銅製、鋳出しが不鮮明で、装身具や持物について詳細は不明である。蓮華座に坐した尊像は右手を胸前、左手を膝上に配す。背面には鏡板に装着するための把手が鋳出される。SK17 出土。2 は薄い銅板を打ち出し、線刻で表した蓮華座に坐した尊像を表す。表面に沈着した錆により細部については不明。裏面に鏡板に装着するための根を取り付けた痕跡はみられない。B-1 I 層出土。

装剣金具類 (3～4) 目貫 (3) 薄い銅地金を切り出し、線刻を入れ、重なり合った四割菱二双を表す。表面には金メッキの痕跡が一部に残る。裏面に根を取り付けた痕跡はみられない。四割菱の一端が折れ曲がっている。SK10 出土。

筭(4) 耳掻きから穂先まで完存する。耳掻き部分の貝の内の切り込みは一字となる。頸の部分は細く、胴から肩、竿の境はやや角張っている。蕨手は錆化が著しく不明瞭であるが、X 線写真でみると肩部全体に大きく真円に刻む。その下の眉形の切り込みは鋭い。地板中央には別に製作した紋を装着するための孔を穿つ。木瓜形の切り込みも錆化より不明瞭だが、X 線写真で確認できた。全長 20.7cm・胴部幅 1.4cm・穂先幅 0.5cm・厚さ 0.2cm を測る。A-II 層 SD30 出土。

小柄(5-6) 一枚の板を刃方で折り返し、戸尻と棟方で鍍付する。5 は残存長 6.4cm・幅 1.4cm・厚さ 0.5cm を測る。A-II 層出土。6 は全長 8.8cm・幅 1.4cm・厚さ 0.3cm を測る。SK24 出土。

鞘 (7) 鋳の鞘をつなぐ高紐などに用いられる留め具で、銅地金を楕円形に切り出し、直径 6mm の孔を 2 ヶ所穿つ。全長 3.3cm・幅 1.2cm・厚さ 1.5mm を測る。

齒形分銅 (8) 表面上半に「三」の線刻がみられる。幅 1.2cm・厚さ 0.8cm・高さ 1.7cm・質量 9.3g を測る。表面には三刃と鑿打ちされていたのであろう。蛍光 X 線分析の結果、銅のピークが突出しており、次に亜鉛が見られることから、真鍮とみられる。SK17 出土。

煙管 (9) 雁首で、腕形の火皿部から湾曲する頸部まで残存する。SK22 出土。

耳掻き (10) 長さ 8.8cm を測る。SX35 出土。

まち針形銅製品 (11) 一方の端に向かって細くなり、反対側の端には径 5mm の球体が付く。長さ 7.5cm を測る。B-1 I 層出土。

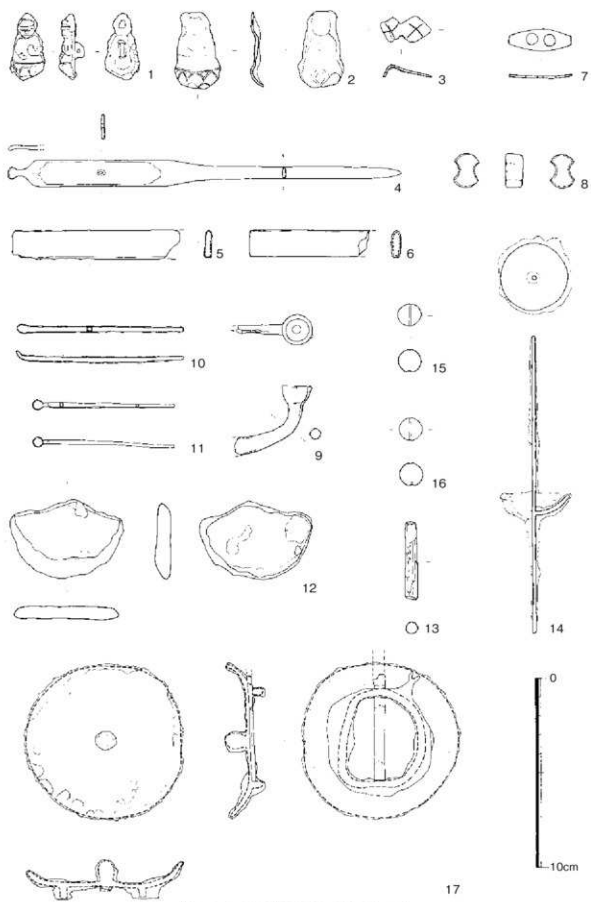
餅状鉛塊 (12) 蛍光 X 線分析では鉛、錫のピークが突出しており、両者を合わせた合金はんだとみられる。SK17 出土。

棒状鉛 (13) 両端は丁寧に整形し、側面は縦方向に細かく削り出す。直径 0.7cm・長さ 4.1cm を測る。SK06 出土。

鉄製紡錘車 (14) 軸棒ともに鉄製で、直径 3.8cm・深さ 1.4cm の皿状の紡錘車の中心に撚棒を挿入するための孔を穿つ。撚棒は両端が欠失し、両端に行くにつれて径を減じている。残存長 15.8cm・最大径 3.5mm を測る。SK13 出土。

鉄砲玉 (15・16) 直径 1.2cm の球体で、外周に沿って幅 1mm の浅い溝がめぐる。2 には溝の中に径 0.5mm の孔がみられる。蛍光 X 線分析では鉄のピークが突出しており、鉄製とみられる。質量 3.6・3.0g を測り、体積 0.9cm³ に鉄の比重 (7.12) を乗じた数値 6.4g に及ばず、中空とみられる。SK17 出土。

灯籠 (17) 口径 8.3cm・器高 1.5cm の小皿の外底に径 5.4cm・高さ 0.5cm の高台、内底中央に径 1.0cm・高さ 1.1cm の柱状突起が付く。突起上で灯芯に点火する方式の灯籠とみられる。高台基部に幅 5.5mm の孔を穿ち木製の棒を水平に貫入している。蛍光 X 線分析では銅のピークが突出しており、主成分は銅で、合金ではなく銅単一の製品とみられる。SX35 出土。



第37図 金属製品実測図 (縮尺 1/2)

木製品（第38・39図）1～14はSK17出土である。

箸（1～4）ヒノキ板目材を用いる。1～3は断面円形で、最大幅0.6～0.8cmを図る。両端まで完存する1は両口で長さ25.8cmを測る。4は断面方形で、最大幅0.65cm・最大厚0.4cmを測る。有頭棒状木製品（5）一方の端が肥厚する。用途は不明で、残存長13.8cm・最大幅1.2cmを測る。スギ板目材を用いる。

柄杓（6）曲物に柄を斜めに挿入する柄杓で、曲物上部・底板・柄は欠失している。曲物下部で柄を装着するための穿孔を確認したが、対面は曲物上部が欠失しているため穿孔が残存していない。穿孔の左右と対面には補強材を縦方向に差し込む。曲物の直径14.0cm・残存高6.0cmを測る。針葉樹（アスナロカ）板目材を用いる。

折敷（7～9）隅を落とした正方形の底板に木釘で組み合わせの側板を付ける。側板は欠失している。7・8は同一規格による正方形の四隅を切り落とすもので、底板が完存する。一辺9.3～9.6cm・厚さ0.25～0.3cmを測る。向かい合う2辺の中央に側板を打ち付けた木釘の孔が残る。針葉樹とみられる柘目板材を用いる。9は長さ29.6cm・残存する最大幅4.2cm・厚さ0.5cmを測る。側板が付いていた部分には木釘の跡が残る。上面の側板が付いていた部分以外と側面には黒漆が残る。スギ柘目材を用いる。

板（10）長さ14.5cm・幅7.7cm・厚さ0.5cmを測る名刺サイズの薄板である。用途は不明である。ヒノキ板目材を用いる。

羽子板（11）身の下端から柄にかけて2段の折り込みを行う二手切りによる。柄は下端に向かって僅かに幅を広げる。長さ28.0cm・厚さ1.0cm・最大幅7.0cmを測る。スギ板目材を用いる。

下駄（12・13）連南下駄で、12の平面形は隅丸方形を呈する。I1c1。スギ斜め材を用いる。13は方形を呈する。スギ板目材を用いる。I4b1。

板（14）残存長24.0cm・幅5.6cm・厚さ3mmの薄板で、残存する短辺の一端には木釘の跡が残る。折敷底板の一部もしくはその再利用品の可能性が考えられる。針葉樹とみられる板目材を用いる。

漆器（第39・40図）

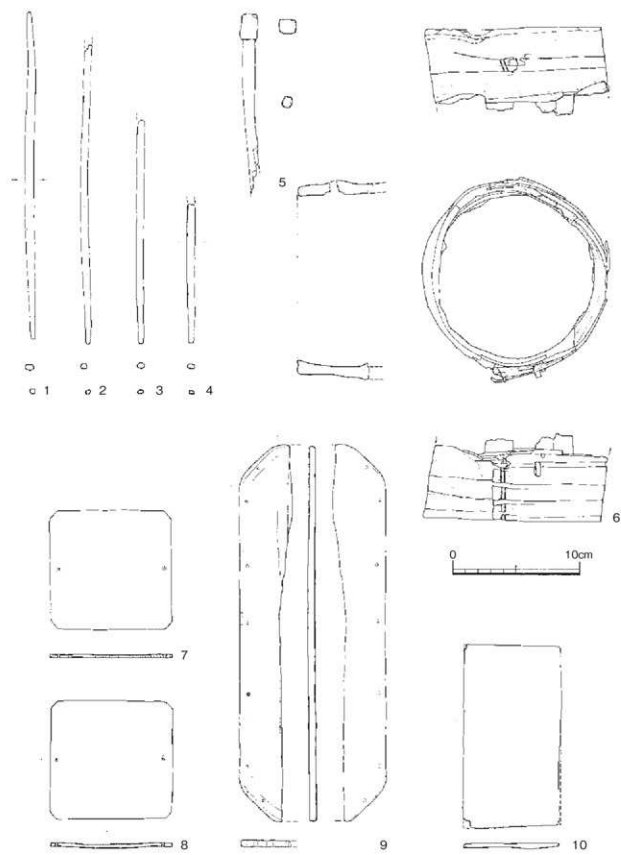
折敷（15）残存長22.6cm・高さ2.6cm・厚さ7mmを測る折敷の側板で、側面の一個に赤漆、上端ともう一個に黒漆を配し、下端には漆の塗布はなく木釘の跡が残る。スギ板目材を用いる。SE31 井戸枠内出土。

小皿（1）内面赤漆、口縁部黒漆、体部外面赤漆、外底黒漆を配し、体部外面に黒漆で草花文を描く。外開きの低い高台を削り出す。口縁部の1/4は欠失し、口径9.5cm・器高1.9cm・高台径5.4cmを測る。SK19出土。

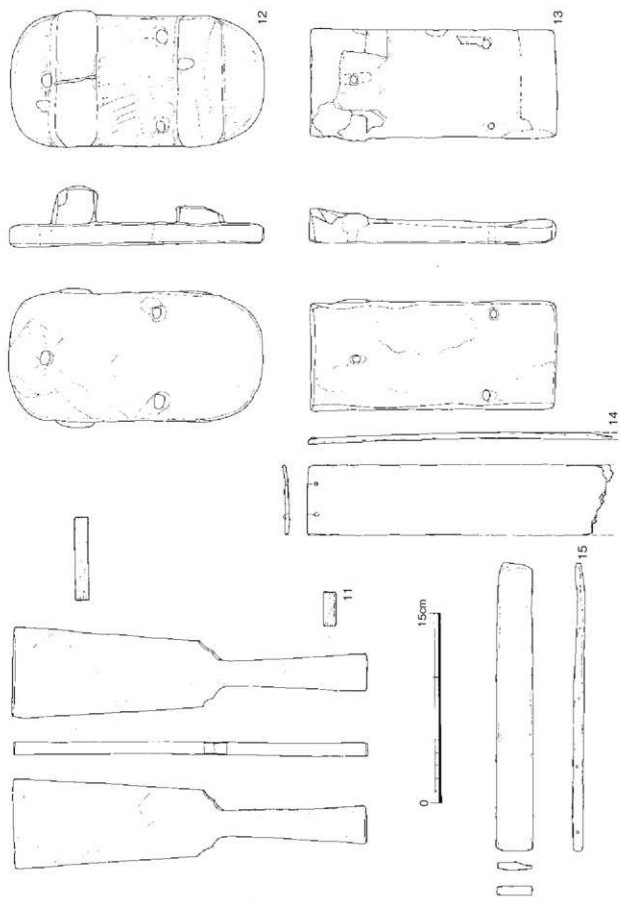
碗（2・3）2は内面赤漆、外面黒漆を配し、体部外面に黒漆で草花文を描く。口縁部と高台基部より下位が欠失している。高台基部復元径3.8cmを測る。SE31 井戸枠内出土。3は底部片で、高台端部が欠失している。外面に赤漆を配し、内面は火を受け炭化している。外底に黒漆で「井桁」を描く。高台基部径6.2cmを測る。SK17出土。

銅銭（第40図・第1表）内眼、X線写真を含め銭文が判読できたものを第1表に示す。その内、腐蝕が進んでおらず銭文が明瞭に残るものは保存処置後に拓影をとった。拓影は第40図に示す。初鑄年の順に配置し、拓影右下の番号は第1表の番号と対応する。銭名・初鑄年・出土遺構・層位については第1表を参照されたい。

出土した銅銭の内、銭文を判読できたものは125点で、唐銭7点・北宋銭61点・南宋銭1点・明銭35点・寛永通寶3点、銭名の確定に至らなかったものが19点である。明銭の内訳は洪武通寶7点・永楽通寶27点・宣徳通寶1点である。



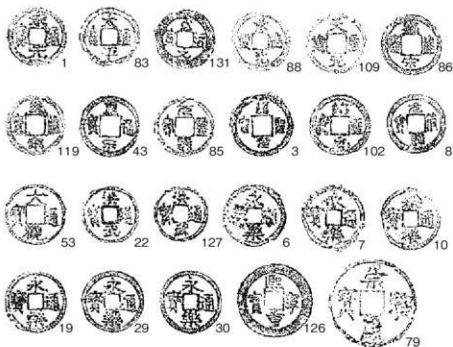
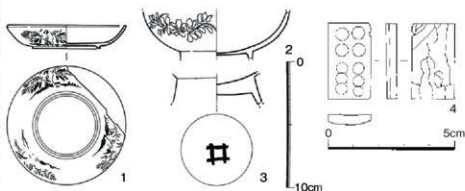
第38図 木製品1実測図 (縮尺1/3)



第 39 図 木製品 2・漆器 1 実測図 (縮尺 1/3)

16世紀後半の溝SD30からは銭名を特定できた銅銭が21点出土している。唐銭1点・北宋銭14点・明銭6点（明銭の内訳は洪武通寶1・永楽通寶4・宣徳通寶1点）と明銭が29%を占める。

16世紀末～17世紀初頭のSK17からは5点の内3点が明銭（洪武通寶1・永楽通寶2）で占有率が倍増している。85～98（登録番号25、A-1グリッドI層出土）は銭摺で束ねられていたとみられ、銭名が特定できた13点の内、北宋銭6点・南宋銭1点・明銭6点（永楽通寶5）と、明銭が半数近くを占める。A-2グリッドI層からは、18点中8点が明銭（洪武通寶1・永楽通寶7）で44%



第40図 漆器2（縮尺1/3）・骨角製品実測図・銅銭拓影（2/3）

を占める。限られた事例ではあるが、16世紀後半から17世紀初頭に向け、明銭（特に永楽通寶）が占有率を高める傾向にある。

骨角製品 骨牌（第40図）（4）A-1 I層から出土した。中国の遊戯牌九に用いられた牌で、四六紅頭に相当する。動物の牙を全長3.0cm・幅1.7cm・厚さ0.4cmの板状に成形、平坦に仕上げられた一面にはサイコロの4と6の目を並べたような配置で合計10の目を配する。目は深さ1.5mmの円錐に穿ち、4の目が径5.5mm、6の目は径4.5mmを測る。長辺に沿った平坦面の表側は表面が剥離している。裏面も剥離がみられるが、素材本来の曲面が残る。素材の分析結果については付編を参照されたい。

No.	造構	銭名	初铸年	備考	No.	造構	銭名	初铸年	備考	No.	造構	銭名	初铸年	備考
1	1 SK01	宋元通宝	960		49	17 SD30	□□□寶			85	25 A1 1冊	元豊通寶	1078	篆書体
2	5 SK06	永樂通寶	1408		50		皇□□寶			86		皇宋通寶	1038	
3		紹聖元寶	1094	篆書体	51		至和元寶	1054		87		永樂通寶	1408	
4		□□通寶			52		元祐通寶	1086		88		景德通寶	1004	
5		祥符元寶	1008		53		大觀通寶	1107	瘦金体	89		天禧通寶	1017	
6	6 SK11	永樂通寶	1408		54		洪武通寶	1368		90		永樂通寶	1408	
7		永樂通寶	1408		55		□□□寶			91		永樂通寶	1408	
8	7 SK12	元符通寶	1098	篆書体	56		祥符元寶	1008		92		永樂通寶	1408	
9	8 SK13	洪武通寶	1368		57		宣德通寶	1433		93		□□□寶		
10		開元通寶	621		58		大觀通寶	1107	瘦金体	94		聖宋元寶	1101	
11		嘉祐通寶	1056		59		開元通寶	621		95		皇宋通寶	1038	
12		嘉祐通寶	1056		60		紹聖元寶	1094	篆書体	96		永樂通寶	1408	
13		元祐通寶	1086		61		永樂通寶	1408		97		洪武通寶	1368	
14		至和通寶	1056		62		皇宋通寶	1038		98		淳□元寶	1174	淳熙元寶
15		□□□寶			63		元祐通寶	1086	篆書体	99	26 A1 1冊	宋元通宝	960	
16		洪武通寶	1368		64		天禧通寶	1017		100	27 A2 1冊	天禧通寶	1017	
17		永樂通寶	1408		65		皇宋通寶	1039	篆書体	101		永樂通寶	1408	
18		元符通寶	1098	片不明	66		嘉祐通寶	1056		102		紹聖元寶	1094	
19	10 SK17	永樂通寶	1408		67		元□通寶			103		皇宋通寶	1038	
20		嘉祐通寶	1056		68		永樂通寶	1408		104		嘉祐通寶	1056	
21		皇宋通寶	1038		69		□□□寶			105		聖宋通寶	1101	篆書体
22		洪武通寶	1368		70		□□元寶			106		永樂通寶	1408	
23		永樂通寶	1408		71		元祐通寶	1086		107		□□通寶		
24	12 SK19	洪武通寶	1368		72		永樂通寶	1408		108		永樂通寶	1408	
25		太平通寶	976		73		永樂通寶	1408		109		天聖元寶	1023	
26	13 SK25	開元通寶	621		74		元祐通寶	1086		110	28 A2 1冊	永樂通寶	1408	
27		元祐通寶	1086		75		□□元寶			111		永樂通寶	1408	
28		元祐通寶	1086		76		政□□寶	1111	政和通寶	112		永樂通寶	1408	
29		永樂通寶	1408		77		元□□□			113		開元通寶	621	
30		永樂通寶	1408		78	18 SD37	祥符元寶	1008		114		紹符元寶	1009	
31		天□□寶			79	19 SK42	崇寧元寶	1102	龍跡付注	115		天聖元寶	1023	
32		□□□寶			80		聖宋元寶	1101		116		永樂通寶	1408	
33		元□□寶			81		開□□寶	621	開元通寶	117		□□武通	1368	洪武通寶
34	14 SK26	永樂通寶	1408		82		寬永通寶	1636		118		皇宋通寶	1038	
35		至道元寶	995	草書体	83	23 SX38	太平通寶	976		119	30 B1 1冊	皇宋通寶	1038	
36		永樂通寶	1408		84	24 SE31	祥符元寶	1008		120		□□□寶		
37		聖宋元寶	1101		126	33 K-02	熙寧重寶	1072	折二銭	121		熙寧元寶	1068	
38		開元通寶	621		127		洪武通寶	1368		122		政和通寶	1111	
39		熙寧元寶	1068		128	34 K-04	寬永通寶	1636		123		□□□寶		
40		元豊通寶	1078		129		寬永通寶	1636		124		景□□□	1004	景徳元寶
41		乾元重寶	759		130	36 K-09	永樂通寶	1408	永樂通寶	125		元豊通寶	1078	元豊通寶
42	15 SK28	紹熙元寶	1090		131	37 I B4-9	至道元寶	995		※「1～3文字が欠落、判読不明であったも銭名を特定できるもの」「書体が行書体以外」「大型銭（折二銭・当十銭）」についてはその旨を備考欄に記した。				
43	16 SD29	皇宋通寶	1038		132		宣和元寶	1119						
44		熙寧元寶	1068		133		元豊通寶	1078						
45		元豊通寶	1078		134		祥符元寶	1008						
46		祥符元寶	1008		135		紹聖元寶	1095						
47		□□元寶		篆書体	136		元□□寶							
48		皇宋通寶	1038		137	38 辨土	政和通寶	1111						

第1表 銅銭一覧表

IV 小 結

検出遺構の時期 本調査でまとまった遺物が出土し、年代推定が可能な遺構は以下の通りである。

16 世紀第 3 四半期 I 層 16 世紀第 4 四半期 SE31・SD29・SD30・SD37・SK06・SX21

16 世紀末～17 世紀初頭 SD16・SK01・SK17・SK18・SX08・SX35

I 層上面では 16 世紀末～17 世紀初頭の遺構は明確に遺構が確認されたが、16 世紀第 4 四半期の遺構は I 層をやや掘り下げた段階で漸く確認され、石積土坑にいたっては石積が確認されてもその掘方は確認には困難を伴い、検出できなかった例もある。従って、I 層として取り上げた遺物には I 層上面から掘り込まれた遺構に伴うものも少なくない。また、12～16 世紀前半に位置付けられる中国陶磁も散見されるが、SK12・13 を除いてプライマリーな出土状況ではなく、混入したものである。遺構が密に分布していたのは、16 世紀第 4 四半期、次いで 16 世紀末～17 世紀初頭となる。町割や戦乱後の復興に関する遺構として溝 SD29・30・37、方形の土坑 SK17、石積土坑があるが、そのほとんどは主軸の方位が N・45°・W 前後に取まっている。今回の調査や隣接する第 159 次調査近辺で検出された遺構からは大きな変化を窺えなかったが、遺物組成については、時期毎に明らかな変遷を捉えることができた。16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけての博多を政治的側面から区分すると、大友氏支配期 (1551～1587) → 豊臣政権期 (1587～1598) → 秀吉没後 (1598～1615) となり、豊臣政権期以降に不可分な関係にあった大坂城における区分〔石山本願寺期 (1496～1580) → 豊臣大坂城前期 (1583～1598) → 豊臣大坂城後期 (1599～1615)〕1 と共通点を見出すことができる。

遺物組成・形態の変化 中国陶磁では、16 世紀後半以降の戦国期城館の発掘調査で広く出土している文様や図像の外郭線内側を塗りつぶす染濃技法を用いた青花、出土量は少ないが釉の上に彩色を加えた五彩が出土している。16 世紀後半以降、青花端反り皿は内湾口縁の丸皿に、白磁端反り皿は菊皿に置き換わり、外底に年款や吉祥句を記すものが多くみられるようになる。青花は蓮子碗・暮笏底皿ともに陶器質に近い胎土に発色不良の釉が掛かり、釉下には簡略化した粗雑な文様を描く華南産の粗製品がみられるようになり、高台まで釉が掛からない碗も多い。16 世紀末～17 世紀初頭の遺構からは漳州窯系の青花芙蓉手皿が SK17、皿底部が SK01 から出土している 2。

朝鮮陶磁が 16 世紀後半代において占める比率は、博多では地理的要因もあり中世前期における高麗陶磁と同様に国内では群を抜いたものとなっている。遺構 SK25 から印花繩縷文版、SD37 からは刷毛目碗・皿、さらには前面に白化粧土を掛ける粉引碗といった白化粧土を多用する白磁を志向した粉青沙器が出土している。16 世紀第 4 四半期に入ると、SD20 から白磁碗・杯・皿、SK06 から白磁碗、SX21・35 からは白磁碗が出土するなど、白磁が高い頻度で出土し、粉青沙器から白磁への移行を窺うことができる。白磁は碗・杯・皿からなり、全形を復元できる資料がまとまって得られた。碗は体部がやや丸みを持って直線的に外上方に延びる型が主であるが、削り出し高台や内底見込みの形状など多様で、それらが時期差、生産地の違いのいずれによるのか、今後の検討課題である。施釉陶器では SD29 から雑軸皿・すり鉢、SD30 から雑軸皿、SD37 から雑軸皿・瓶、I 層から雑軸皿が出土しており、雑軸皿の出土が多い。碗は少ないが、白磁碗と認識した中に、雑軸陶器等の施釉陶器が含まれるかもしれない。16 世紀末～17 世紀初頭の遺構からは文祿・慶長の役 (1592～1598) の影響下、肥前陶器が取って代わり、SK17 では朝鮮陶磁はほとんどみられない。

肥前陶器は朝鮮陶磁や瀬戸美濃系陶器に代わって 16 世紀末～17 世紀初頭の遺構 SK17・18 から古段階の肥前陶器が出土している。SX08 では瀬戸美濃系陶器と共存している。大坂城においても豊臣前期ではほとんど出土していないが、豊臣後期には大量に出土している。

瀬戸美濃系陶器は天目碗・灰軸皿が出土しているが、全体を通じて出土量は少ない。16世紀第3四半期のI層から灰軸端反皿、16世紀末～17世紀初頭のSX08から鉄軸天目碗・灰軸小碗が出土している。天目碗は輪高台で、大窯後期様式I期3に位置付けられ、出土遺構の時期より古いものである。

備前焼はSK09・SK24・SX38・A-I層から1570年頃（16世紀第2四半期末）～1600年頃に位置付けられる近世1b期のすり鉢4、SD16・SX35からは1600年頃から1615年頃に位置付けられる近世1c期のすり鉢が出土している。すり鉢の他に、SK24から耳壺、SK42からは口縁部下に柱状の注口を貼り付ける平底の片口鉢が出土している。

在地土師器は中世前期では小皿や杯が主で、時期限定で特小皿・丸底杯・大皿・碗が加わり、数器種におさまるが、中世後期に入ると、小皿・杯はさらにいくつかの形態に細分化している。搬入品を含め、器種分類を厳密に行い、編年作業を行わなければならない。小皿・杯の底部切り離し技法をみると、16世紀後半の溝SD29・30・37出土土師器の切り離しはすべて回転切り離しによるが、16世紀末～17世紀初頭のSK17出土土師器では小皿14点中7点が回転切り離し、7点が静止切り離し、杯7点中3点が回転切り離し、4点が静止切り離しにより、約半数が静止切り離しに移行している。16世紀第3四半期に位置付けられるI層のA-2区出土土師器小皿11点中2点が静止切り離し、杯3点はすべて回転切り離し、B-1区出土土師器小皿10点中2点、杯5点中1点が静止切り離し、静止切り離しが約2割を占めるが、それが混入による可能性も否定できない。底部静止切り離しの土師器小皿・杯の初現がどこまでさかのぼるのか現時点では明言できない。しかしながら、瓦の粘土塊からの切り離し方法が糸切り（コビキA）から鉄線切り（コビキB）へ移行する時期にその比率により大まかな年代を推定することと同様に、土師器底部の切り離し方法の比率でもって生産年代を窺うことも可能ではないか。

SK17からは箸・柄杓・折敷・羽子板・下駄・漆器碗、SE31からは漆器折敷個板など木製品がまとまって出土している。羽子板は付け根が二手切りの型で、同型の羽子板はSK17と時期が重なる豊臣大坂城でまとまって出土している5。同時期、もしくは少し下る時期の県下出土例として、久留米市城下町両替町遺跡6、北九州市北方遺跡7、大野城市御笠の森遺跡8出土資料があげられる。両替町遺跡出土例は池状遺構から出土したもので、2点の内1点が二手切りで柄は欠失している。池状遺構からは16世紀末～17世紀初頭の青花や肥前陶器をはじめ多種多様な遺物が出土しており、元和6年（1621）の久留米藩代藩主有馬豊氏入国直後に埋められたとされる。北方遺跡出土例は17世紀前半に埋没した溝から出土した全長33.8cmの二手切りの型で、柄の占める割合は38%、御笠の森遺跡出土例は17世紀後半に埋没した溝から出土した全長28.5cmの二手切りの型で、柄の占める割合は31.5%、今回報告のSK17出土羽子板が柄の割合が全長の41%を占め、豊臣大坂城出土羽子板の柄の割合が40%以上であることから、時期が下るにともなう柄が短くなる傾向にあるようである。

跡は検出されなかったが、トリバや羽口がまとまって出土するなど製造など金属器生産工房が近辺に存在したことは確かであろう。刀装具では目貫・筭・小柄、甲冑関連では鞆が出土しており、武具の生産が想定されるが、未成品はみられず、それらの生産を断定するまでには至らない。

今回の調査では16世紀後半の遺構や層位からコンテナ（容量18L）55箱の瓦が出土した。天正15年（1587）秀吉の命による博多の復興の際に、筑前領主小早川隆景から神屋宗湛に宛てた文書（「島井文書」）の中に「分際之者共、悉瓦可仕候、其之下者、板屋竹瓦二」とあり、分際之者には瓦葺きを命じた記事がみられる。今回の調査で出土した瓦の多くは破損によって16世紀第4四半期の遺構に廃棄されたものである。軒丸瓦の外区素文縁、軒平瓦の脇区は幅が狭く、領主の居城名島城出土瓦より古期に属し、様相を異にする。軒平瓦の中心飾りについても名島城9では三つ葉が主であ

るのに対し、今回の調査で出土したものは宝珠で、均整唐草文も全く異なる意匠である。宝珠の中心飾りの左右に3回反転する均整唐草文を配した軒平瓦（SE31-26,SK05-11）や櫛田宮の文字を配した軒丸瓦（SD29-18）は、同范瓦が博多遺跡群第94次調査10（聖福寺旧塔頭）検出の溝SD102で出土しており、下限の時期を15世紀前半にもとめることができるが、博多に所在する社寺の主要な建物に葺かれた所用瓦が復興に際し再利用された可能性も考えられる。屋根瓦の他、隅に釘穴が穿たれた方形薄片がSE31から1点、SK02から3点出土している。厚さは平瓦とほぼ同じで、建物の外周基礎に貼り付けられたものとみられ、土蔵の腰巻に用いられたものもあろう。

◇註

- 1 大阪市文化財協会1988『大坂城Ⅲ』／大阪市文化財協会1992『難波宮址の研究』第九／
- 2 小野正敏1985『出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描』『MUSEUM』No.416
- 3 伊藤嘉章1994『和物天目—瀬戸・美濃窯における天目の展開—』『唐物天目』茶道資料館
- 4 乗岡実2002『近世備前焼揺鉢の編年案』『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
- 5 大阪府文化財調査研究センター2002『大坂城址Ⅱ』
- 6 久留米市教育委員会1996『兩替町遺跡』
- 7 北九州市教育文化事業団1986『北方遺跡』
- 8 大野城市教育委員会2004『御笠の森遺跡Ⅰ』／大野城市教育委員会2005『御笠の森遺跡Ⅱ』
- 9 福岡市教育委員会1993『名島城跡Ⅰ』
- 10 福岡市教育委員会1999『博多66』

博多遺跡群第247次調査出土骨牌の材質

新美倫子（名古屋大学博物館）

博多遺跡群の第247次調査ではA-1区の1層から骨牌が1点出土した。この資料は長辺3cm×短辺1.7cmの長方形で厚さは0.4cmである。片面には10個の円形の凹みが掘られている（図1）。資料に関する詳細は第Ⅲ章を参照されたい。

図1において黒色矢印で示した資料の側面（短辺）には複数の層が同心円状につき重なっているのが見られ（写真1）、灰色矢印で示した側面（長辺）では、これらの層は直線状に重なっている（写真2）。また、表面が風化・剥落している部分を観察すると、この層状の構造に沿って剥落が起きている（写真3）。断面に層状の構造が見られることから、この資料は骨やシカ類の角ではない。時間の経過と共に組織が付加されて成長線を形成するタイプの原材で、哺乳類の歯あるいはウシ科など一部のグループの角と考えられる。その点では「骨牌」という器種名は実情を反映していないとも言える。

そして、資料の剥落部分などの質感から見て、角ではなく歯であろうと思われる。側面（短辺）に見られる層状構造が同心円で、側面（長辺）の層状構造では直線が平行線であることから、バウムクーヘンのような円筒状の成長輪のある原材を使用したと考えられる。この条件を備える歯としてまず考えられるのは象牙である。参考資料として写真4に象牙（現生標本）の断面を示した。象牙以外にも、例えばマッコウクジラの歯やセイウチの歯などでも同様の製品の作製は不可能ではないが、層状構造に見られる同心円があまり歪んでおらず正円に近いことから、象牙の可能性が高いように思われる。ただし、当資料の側面（短辺）には象牙の横断面に見られる特有の菱形模様（シュレーゲルパターン）は確認できない。この資料が象牙製であるにもかかわらず風化等のせいで菱形模様が見えないのか、あるいは象牙製でないから菱形模様を確認できないのかはわからない。

なお、福岡市埋蔵文化財課の佐藤一郎氏と岩熊拓人氏にはこの資料を分析する機会を与えていただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生には象牙についてのご教示をいただいた。ここに感謝いたします。

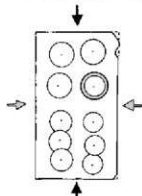


図1 骨牌の表面



写真1 側面（短辺）



写真2 側面（長辺）



写真4 象牙断面（現生標本）



写真3 剥落のようす



1. 博多遺跡群跡 247 次調査 I 層上面全景 (北西から)



2. 博多遺跡群跡 247 次調査 I 層上面全景 (北西から)

図版 2



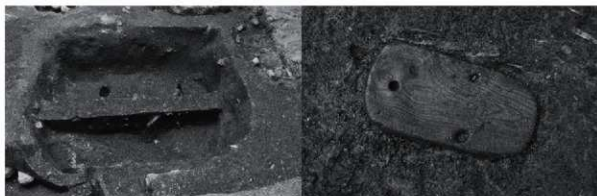
1.SE31 井戸枠上段 (南西から)

2.SE31 井戸枠下段 (南西から)



3.SK12 土坑 (南西から)

4.SK16 土坑 (南東から)



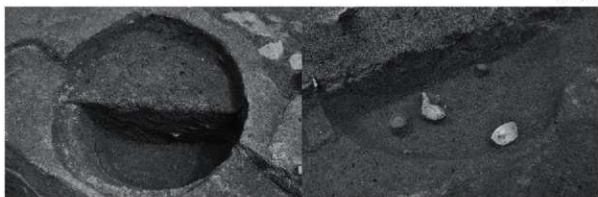
5.SK17 土坑 (南西から)

6.SK17 下駄出土状況 (北西から)



7.SK17 羽子板出土状況 (北西から)

8.SK17 柄杓出土状況 (北西から)



1. SK28 土坑 (南から)

2. SK33 土坑 (西から)



3. SX35 埋納土坑掘方 (南東から)

4. SX35 埋納土坑木箱痕跡 (南東から)



5. 博多遺跡群第 247 次調査 A-1 I 層下面 (北西から)

図版 4



1. A-1 北西壁面土層（南から）

2. SD37（北西から）



3.A-11 層筭出土状況（南から）

4. 発掘作業風景



5.SX08 石積土坑（北西から）

6.SX27 石積土坑（北東から）



7.SX20 石積土坑（南西から）

8.SX20 石積土坑（南東から）



1.SX21 石積土坑 (南西から)



2.SX38 石積土坑 (北西から)



3.SX38 石積土坑 (北東から)



4.SX35 下面検出石積土坑 (北西から)



5. 懸仏 X 線写真



6. 目貫 X 線写真



7. 筭 X 線写真

報告書抄録

ふりがな	はかた 198							
書名	博多 198							
副書名	博多遺跡群第 247 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1511 集							
編著者名	佐藤一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2024 年（令和 6 年）3 月 22 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群 (第 247 次調査)	福岡市博多区 店屋町 104 番、 105 番（地番）	40132	121	33° 35' 45"	130° 24' 34"	20210426 ～ 20210831	262.3㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
博多遺跡群	集落	古墳・古代・ 中世	井戸・溝・土坑	土師器・陶磁器・瓦 土製品・石製品・金属製品				
要 約	<p>16 世紀第 3 四半期の遺物包含層上面で、16 世紀第 4 四半期の井戸 SE31、溝 SD29-30-37、土坑 SK06、石積土坑 SX21-35、16 世紀末～17 世紀初頭の土坑 SK16-17-18、石積土坑 SX08 他を検出した。</p> <p>町割や戦乱後の復興に関する遺構として溝、方形土坑、石積土坑がある。そのほとんどは主軸の方が N-45°-W 前後に取まっている。遺構や遺物包含層からは、中国陶磁（青花・五彩）、朝鮮陶磁（粉青沙器・白磁・陶器）、瀬戸美濃系陶器、備前焼、肥前陶器など多種多様な陶磁器が出土した。中でも朝鮮白磁は良好な状態でまとも出土しており、特筆される。</p>							

博 多 198

— 博多遺跡群第 247 次調査報告 —

2024 年（令和 6 年）3 月 22 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 末松印刷株式会社
福岡市博多区東那珂 2 丁目 4 番 36 号

